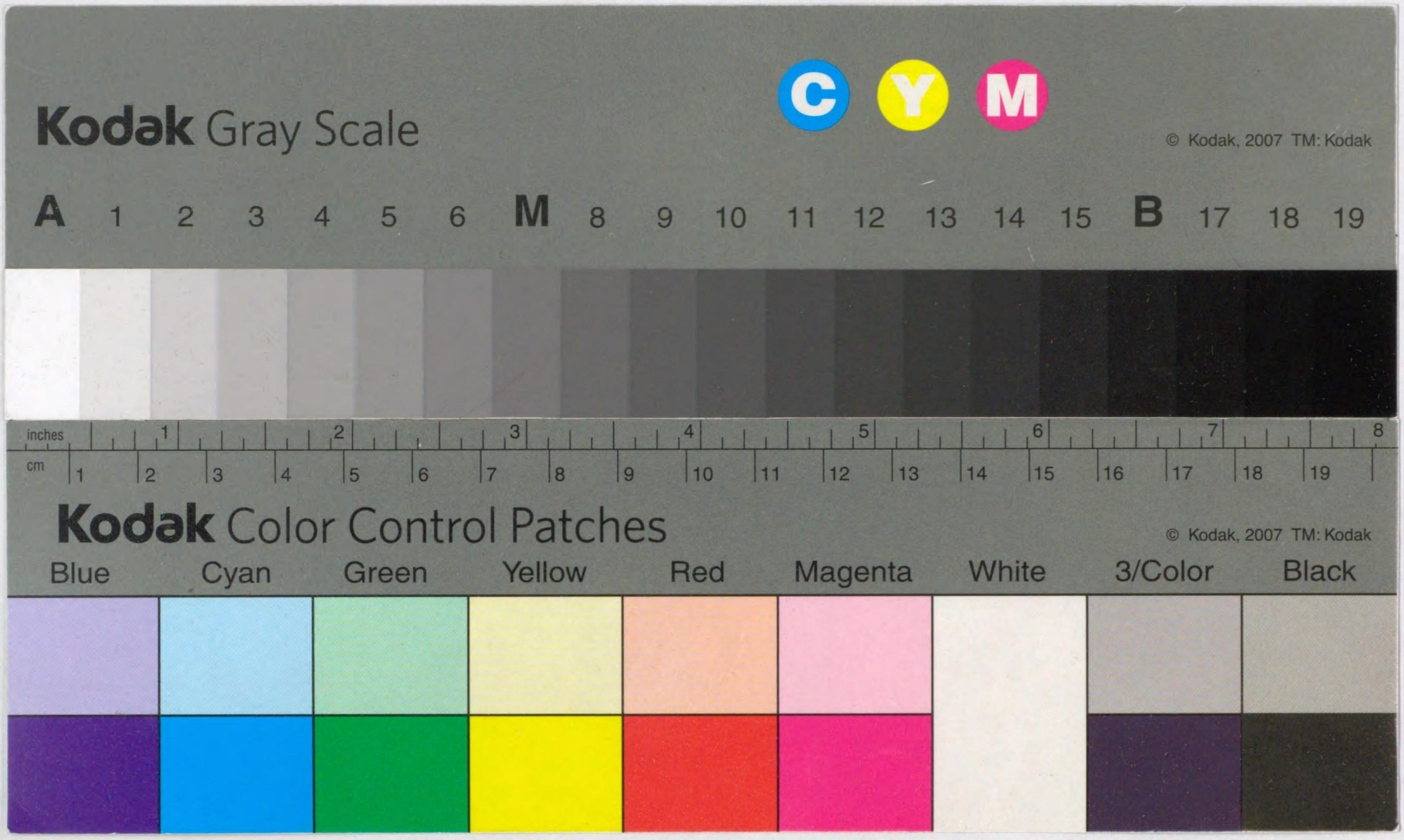

315
192
315-192
1200701771022

早稲田大學第二十回
科講義錄

文學博士 金澤庄三郎述

語學通論

早稲田大學出版部藏版

大正
5.5.29
製本

國語學通論目次

第一章　總論……一
第二章　音韻の組織……九
第三章　單語の構造……二五
第四章　假名遣……四八
第五章　文法の研究……六一
　第一節　體言に關する語法……六三
　第二節　用言に關する語法……七一
　第三節　助辭に關する語法……一〇八
第六章　文法上の誤謬……一五五

（目次了）

國語學通論

文學博士　金澤庄三郎述

第一章　總論

我日本帝國は言葉の國である、支那は文字の國、その他の外國は聲の國であると昔の人もいつて居るやうに、我國は言靈のさきはふ國言靈のたすくる國と語り傳へて、昔から言葉を重んじる國柄である。言葉（コトバ）といふ語は多分「辭林言葉（ゲンエフ）」などといふ漢語から出たものであらうが、もと言（コト）は口（クチ）と同一語源のもので、丁度英語 language（國語）が拉丁語 lingua（舌）から轉じて居るのと似て居る。言（コト）から事（コト）が出來、道理をコトワリといひ、征服をコトムクといふなどは世の中の萬事皆言葉に基いて居るからで、法則（ノリ）が宣（ノル）といふ語から出て居るのも同じ譯である。

もと言語は人類の思想を代表するものであるから、國語はやがて社會文化の歷史であつて、國民心理の寫眞とも見るべきものである。殊に我國の如く言語を重んじる

國風のところでは尚更さうである。それ故言葉の學問は、音韻だの文法だの、寧ろ實社會に緣の遠い無味乾燥なものとのみ思ふのは、非常な間違である。言語は社會一切の登記簿で、どのやうな事件も細大漏さず、みなこの帳面に載つて居るから、歷史家人類學者などの手の屆かぬことも、言語の調査から發見せられることがある。廣義に於ける言語學とは、かやうに言語を辿つて文化の源泉を探らうとする科學で、實に趣味津々たるものである。

我國の古代には食物を木の葉の上に盛つたもので、今も食物の上に葉を蔽ふことのあるのはこの遺風である。故に炊葉（カシハ）といふ語が出來、炊葉には柏の葉を多く用ひたから、この樹をもカシハと稱へるやうになつた。盞を古くウキハといふのも、もと葉を用ひたからである。今日の猪口（チョク）は鍾の朝鮮音chongで、其他膳椀（ゼンワン）などは字音である。皿（サラ）はサハリの約で朝鮮語saban(鉢)と同原から、無論彼地から傳はつたものに相違なく、古代の歷史も言語の調で大略わかる。らしく、梵語沙羅とも似て居る。かういふ樣に食器の歷史も言語の調で大略わかる。その他家屋・器具を始とし衣服・飲食の類に至るまで、盡くその變遷の跡を言語の上に印せぬものはない。家屋の下見（シタミ）は板張をいふのであるが、この語はもと蔀（シトミ）から出て、蔀はまた苫（トマ）と同原の語であるから、古代の建築で壁に草を用ひたことが分る、萬葉に

「新室（ニヒムロ）の壁草（カキクサ）苅りに」とあるのは即ちこれである。蒲團（フトン）はもと綿の入つた四角いものではなく、蒲の葉で編んだ圓座である。古代の家屋は殘らず板敷で貴人の爲に特に敷いたものが御座（ゴザ）(薦)で、不用の時に疊むからタヽミといふのである。もとより今日の如く部屋の仕切などもなく、家の大いさは柱と柱との間を間（マ）と稱へ、これを幾間と數へたので、今日居間（キマ）・客間（キャクマ）などいふ間はこれから轉じたものである。御國の風を慕うて四方から集つて來た歸化人の數は、古代から決して尠くない。これらも大抵地名または姓氏で見分けることが出來る。新良（シラギ）・百濟（クダラ）・安良（アラ）などいふ郡名は、みなかの地の歸化人が移植した土地で、安達（アダチ）といふ姓ももとは安太太良（アタタラ）といふ地名から出て、起りはやはり朝鮮である。その他吉田（ヨシダ）姓にも朝鮮の官名吉士（キシ）から出たものがある。また狛（コマ）姓が高麗（コクリ）の歸化人であることは普く人の知るところであるが、狛は貊の略字で、高麗がもと貊族から起つた人種であるが爲に名乘つた姓で、これをコマと讀むのは貊の字注によつたものらしい。字書に貊は熊（クマ）の一種と見えて居る。遙に後世のことであるが、江戸芝に廣東人が移住して、その名前から伊皿子（イサラゴ）といふ地名が出來た。一說に西洋人だとあるが、さらば伊皿子の支那音 i-ming-tse より、Evans などゝいふ名の人であつたらうと高楠博士の考證である。この樣に往古より近代に至るまで絕

えず歸化人があつて、これと共にその地の文物が輸入せられ、文物には必ず言語が伴うて來たから、言語によつて文化の由來を知ることが出來る。

筆・紙・錢の類はいづれも支那から渡つたもので、フデ、ゼニは筆・錢の音、カミは簡の轉音である。味噌の如きは朝鮮語とせられて居るが、滿洲でもこれをmisunといふから、その起原は更に他にあるらしい。行李は日本紀に「骨柳」と見えて、古くから我國に傳つたものであるが、朝鮮でもkoriといひ、その源はやはり明かでない。蜜は梵語madhu の音譯で、もとの起りは歐洲の北部のフィン語である。ホルトガル人が南洋諸島を經て渡來してからは、西洋の文物言語が夥しく輸入せられた。縞物をシマといひ、布帛に古渡などといふのは、始め南洋の島國から渡つて來たからの名稱である。襦袢はホルトガル語gibão、棧留縞は印度の地名São Tomé、ジャガ芋は南洋爪哇の地名Jacatra、合羽はホルトガル語capaで、近來學生などが多季に用ふるケープといふ外套はこれと同一語源から出て居る。

言語はまた時世の流行に連れて變遷を同じうする。痘痕(梵語abata)、痴者(梵語baka)などは僧徒の隱語で、道具(佛道に用ふる具の義)、普請(普く諸人に請ひて造營する義)、玄關(玄妙に入る關門の義)などは、禪家の語が佛敎の普及と共に通俗の用語となつたもので、駄目・大目・對馬などは碁將棋の用語、擧句・結句・難題などは詩歌の語からいづれも一般に擴まつた。醜女をスベタといふのも西洋骨牌のSpadeから轉じたものである。言語に現はれる國民の心理に就いては容易く論じかねるが、手近い例をいへば、芦を惡に通はせ、梨を無に通はせて之を忌み、反對にヨシといひ、アリの實といふ樣な所謂縁起なる者は大抵言語から起つて居る。祝賀に熨斗を用ひるは樂と音通の故から、武家が香の物三片を忌み、膳の縁の離れるを嫌ふのは「扶持に離る」「甲者身切」と音の通ふからである。歷代天皇の御諡號中の「後」の字は、これを音讀して後醍醐、後白河などゝ申上げる定まりであるが、後深草院に限り後深草と稱へ申す譯は、ゴフカウサウの音が「御不幸」と通じるからで、明和九年を當時の人の忌み嫌つたのも、「迷惑の年」と聞えるからである。その他、迷信の中にも言語に基くものが多い。厄年の中「三十三」は「散々」「四十二」は「死」と類音であるが故で、出爪を切るを忌むのは、入費の出詰といふを避けたのである。明石の人丸の社は安產防火の神として祀られるが、これも人麿の音と「人生」「火留」と似て居るがためである。

言語は時と共に絶えず變遷してゆくものであるから、今日の言葉と德川時代の言葉との間に、もはや尠からぬ相違がある。まして鎌倉時代とか、平安(朝・奈良朝の昔と較

べたなら、達も亦一層甚しい譯である。古代の言語は今日の言語の祖先であるから、丁度一軒の家の系圖を調べるのと同じ樣に、昔から今に至る筋道を明らめなければ、本當に國語の組立を知ることは出來ぬ。これらの古語を調べるに、その時代々々の文學によるべきことは勿論であるが、極邊鄙な山奥などに案外古い昔の言語が滅びずに殘つて居るから、この點からいふと所謂田舍言葉は大切なもので、一概にけなしてはならぬ。ベイベイ言葉とか贅六言葉などゝ、江戸つ子は冷笑してゐるが、語脈の上からいへばベランメー言葉の及びもつかぬ古格を保つて居る。それ故言語の調査には方言の研究が大切であつて、例へば出雲言葉とか九州地方の方言とか、更に進んでは上古我民族が九州から南方に轉じたと考へられる沖繩民族の言語などは、特に學者の注意すべきものであらうと思ふ。方言でさへこの通りであるから、歷史以前に溯つて我が國語と同脈の關係ある語族、例へば朝鮮語の如きものには、まだ〳〵方言などに到底保存されて居らぬ古格が現存して居ることが多い。我が國にはこれまで同語族間の比較研究を試みた學者は極めて少ないが、國語學界未發の眞理は多くこの方面に隱れて居るものと信ずるから、自分は早くからこの研究に身を委ねて、常にその必要を鼓吹してゐるのである。

比較研究の効果は決して單獨に一國語を研究するの比でない。英語 town(都市)はこれをアングロサクソン語 tuna(墻)と比べて、始めて古代の都會はすべて墻壁をめぐらしたものといふことが分る。梵語で日々といふことを nicâ-nicam 即ち「夜々」といふ、英語で一週間を sennight(七夜)、二週間を fortnght(十四夜)といふ。これらに徴すれば、古人が夜を以て時を數へたことが分る。國語でもツキタチ(朔)、ツゴモリ(晦)など、みな月に基いた語で、「夜晝」と數へるのも晝よりは夜の方に重きを置いたからで、第一トキ(時)、トコ(常)などといふ語もツキ(月)から起つて居るのである。また英國の貨幣 penny はラテン語 pannus(布帛)、ラテン語 pecunia(金錢)は pecus(家畜、英語 fee(謝義)は獨逸語 Vieh(家畜)と關係がある、即ちいづれも古代に於ける物品交易の名殘を示すもので、今日の貨幣の起原はこれらの家畜或は布帛の類である。國語で物を「買ふ」といふは「代ふ」といふことで、同じく古代の商業は全く物品交換であつた。多くは五穀の類が交換の標準となつたものである故、商業は普通收穫の時期に行はれた。「商人」を「秋人」といふのはこれがためである。朝鮮では今日も五穀に限り「買ふ」ことを「賣る」というて、「五穀を賣る」ことを「錢を買ふ」といふ。一寸考へてはをかしいやうだが、これも古代の風俗が言語に殘つて居るのである。また獨逸語 Ältern(兩親)は altiron(年長者)から出た語で、

國語「親」(オヤ)は「老」(オユ)から起つて居る。かやうに我が國語とは全く縁のない西洋各國の語を參考としてさへ、もと社會文化の發達は東西その揆を一にしてゐることが多いから、我々の參考となることが決して尠くない。まして根本を同じうする同族語の研究に於ては、その比較より得るところの利益は、到底局外者の豫想だも及ばざる程である。例へはこゝにイラスといふ語がある。これは貸(カス)といふ意の古語で、書紀に「息」(イラスイーラ)「應與貸」(シタマフベシ)などとあるが、今日の人の全く聞き馴れぬ語で、また別にイラフ(貸)といふ語もあつて、これは借(ガル)の意らしい。然るに北海道のアイヌ語には、今日もこの古語が傳つて居つて、貸(カス)ことをirusaといひ、沖繩の方言ではirasun(貸)、irayun(借)の双方とも傳つてゐる。方言研究の必要な所以はこのやうな場合のあるからで、文書の上に滅んだ古語が方言の中に殘つて居ることは夥しい。「四方」をヨモと讀むことは、普通誰も怪しまぬところであるが、よく〳〵考へるに、四をヨと讀むに論はないが、方をモと訓ずるに至つては實に了解に苦しむ譯である。然るに一度眼を朝鮮語に轉ずるに、かの語では今日もモといふ語が行はれて居るので、四方の角をmoといふ。この比較によつて始めて「方」(モ)が我が國の古語であつたことが分るのである。陸奥(ミチノク)をムツと讀むのもこれと同じ譯で、朝鮮語では陸のことをmuといふ。早稻(ワセ)はワセイネの略語で「和佐芽子」(ワサヘギ)「和佐瓜」(ウリウセアワ)「穭」などと、早く出來るのに冠らせて用ひたのを、今日では專ら稻のみに用ひる。それ故ワセといふ語はその實「早」といふだけの意味であるが、これも朝鮮語ojo(早)と比較すべきものである。

以上はまことに些細な例を擧げたに過ぎないが、從つて求むれば從つて新らしい事實が發見せられるので、同じ材料だけでは、いかな名人鉅匠も十分にその腕を揮ふことが出來ぬ。今日はもはや古人の糟粕を嘗めて滿足すべき時代ではない。宜しく眼界を廣めて、材料の得べきだけを集め、古人の企て及ばなかつたところに力を盡すことが、これやがて今日の學者の責務であらうと思ふ。

以上比較研究の効果について吾人の宿説を述べたが、この見地から國語に關する諸種の問題に就いて解説を試みようと思ふ。まづ音韻から始める。

第二章　音韻の組織

言語は場所により時代に應じて殆ど絶えまなく變りつゝある。もと我々の思想を聲音に寫したものが言葉であるから、言語の變遷は即ち音韻の變遷であるが、千言萬語を組み立てゝ居る聲音の組織は案外簡單なもので、それか移り變るのもまた主と

して輕便主義に基いて居る。今聲音の組織とその變化の順序とを一通り説明せうと思ふ。

人間の聲は皆喉笛のところから出るものゝやうに思はれるが、事實はさうでない。喉笛は聲帶といふもので、左右から肉が迫つて中央に細い通り道の出來る、それを氣息が押分けて外に出ようとするとき、振動を起す仕掛けであるが、聲はこゝで造られるばかりでない。聲帶を普通の呼吸と同じやうに通過した氣息が、それより上で、或は遮られ或は俄に放たれなどして出來るものもある、即ち咽喉の奥からばかりでなく、唇の先舌の先でも聲は出るといふことを先づ知らねばならぬ。

聲帶から起る音の中で、一番肝要なのは母音である。國語で母音といへばアイウエオの五つであるといふことは、誰も知つて居るが、少し深入りすると、このアイウエオが中々むづかしいことになる。アイウエオは僅五つの音であるが、これはたゞ我々が目安に立てた標準で、實際には決してこの五つのみでない。東北の方言にイともエともイともウともつかぬ母音があるやうに一々詳しく分けたならば、その數はいくらになるか知れぬ。何故かといふに、全體聲帶で出來た音が我々の耳に達するまでには、是非口の中を通らねばならぬ、そのまた口の中には舌もあれば齒もあり、これらは唇と共に色々と動くから、口腔の容積もまた樣々に變化する。それゆゑ咽喉で起る聲は一つでも、その響く部屋(共鳴室)の形やら大きさが變れば我々の耳に感じる結果は違はねばならぬ。この音色の差が即ち母音である。アといひイといひウといふも、聲帶で起る音に相違があるのでなく、それより上にある共鳴室の變化によつて起る區別である。イの場合には、唇を偏平にし、舌の前部を上顎に近づける。ウの場合には、唇を窄め、舌の後部を上顎に近づける。丁度イとウとは口腔の樣子が正反對である。この兩者の中間をとつて、口を廣く開き、舌を自然の位置に低めるとアが出來る。アはそれ故イ、ウの中間音といふべき性質を持つて居るが、またアとイと、アとウとの中間音を造ると、これがエとオである。故に際立つた性質からいへば、先づイとウを擧げ、アこれに次ぎ、エ、オを最後に數へねばならぬ。朝鮮語では今なほエといふ單母音を缺き、琉球語ではまだエもオもなく、母屋(オモヤ)を umuya 黄金(コガネ)を kugani などといふ。國語でも大體から云とオよりもウの方が古いらしく思はれる。現眉(ウツ、マユ)を古くオツ、マヨといつたなど、少數の例外はあるが、大抵の場合、古のウ音が後にオに變つて居る。角(ツノ)、野、小竹(シノ)、圍(カコ)の類はいづれも古くはツヌ、ヌ、シヌ、カクムである。育(ソダツ)といふ語は鳥が巢を立つに譬へたもので、もとはヌダツである。木槿花(ムクゲ)、卷目(マキムク)(地名)などに木目(モクモク)

はムクの音に宛てゝある。公方(クバウ)、公卿(クゲ)などには公(ク)と讀み、奉公(ホウコウ)、公私(コウシ)などに公(コウ)と讀むのは、ウオ兩音の近いことを示すもので、大工(ダイク)、工夫(コウフ)、功勞(コウロウ)、功德(クドク)、圖書(ヅグワト)、圖書寮(ショダイヅ)、大豆(ナットウ)、納豆(モツテイキヨウ)、供物(クモツ)、提供(テイキヨウ)などにも同例である。また文明(ブンメイ)、燈明(トウミヤウ)、利益(リヤク)、利益(エキリ)、生活(セイクワツ)、生涯(シヤウガイ)、京阪(ケイハン)、京都(キヤウト)などの例を見れば、アとエとの近いことも分る。いづれにしても、アイウエオの五つを飛び〳〵の音と考へるのは間違で、互に續き合つた音と見るべきものである。即ちアとイとの交接點がエで、アとイとの兩性を攝き交せたものがエで、アとウとの兩性を攝き交せたものがオである。

かやうに二つの母音の性質を折衷するのではなく、一母音の力を弱めて他の母音の頭に結び付けることがある。例へばイとアとを並べてヤを短かく發音するとワが出來る。通例ヤワ兩行とヤが出來、ウとアとを並べてウを短かく發音するとワが出來る。通例ヤワ兩行を半母音と稱へるが、實はかやうに二つの母音が重なるのであるから、重母音といふ方が正しい譯である。以上ア行ヤ行ワ行の三つを音韻學で喉音三行と名づける。

この中ヤ行のイ、ワ行のヰは今日ア行のイと混じて、發音上の區別がなく、またワ行のエ、ヤ行のエはア行のエと混じ、ワ行のウ、ヲはア行のウ、オと混じる。但しワ行のキ、エ、ヲは奈良朝までは明かに發音せられたので、これが亂れ始めたのは天曆(西曆九百四十年頃)以後のことであるが、ヤ行のイ、エ、ワ行のウは和銅養老(西曆七百年頃)の古に溯つても、更にその區別を認めることが出來ない。今日多くの古音を保存して居る朝鮮語でも、ワ行のキ、エ、ヲ、ヤ行のエは區別するが、ワ行のウ、ヤ行のイの區別は更にない。

ある人は夢(ユメ)をイメともいひ、兎(ウサギ)をヲサギともいふ例を擧げて、ヤ行のイ、ワ行のウの存在を論ずるが、このことはまだ十分に分らない。或は五十音圖を作成するときに、他の行との連絡を保つため、國語にない音をも便宜塡めたものではなからうか。

我國語は頗る母音に富んで居る。五十音を見ても分る通り、後にこそン(ン)のやうな一子音の文字も出來たが、最初はカサタナハマラ盡くその綴は母音で終つて居る。こんなにもと〳〵母音の多い言葉であるから、二つ以上の語が組合ふ時などに、母音が二つ並ぶことになれば、大抵の場合その中の一つが省かれる、例へばバクウチ(博打)ことであるが、ウといふ音が重なるから、その一つを省いてバクチとする。手を打(ウ)ち上(ア)げて遊ぶから、もとはウチアゲで、イアと重なる母音の一を省いて、これがウタゲ(宴)となるのである。その他、

鳴海 (naru-umi)

山縣 (yama-agata)

横臼	(yoko-usu)	yokusu
韓鱏	(kara-ehi)	karehi (鰈)
陸奥	(michi-no-oku)	michinoku
淡海	(aha-umi)	ahumi
手洗	(te-arahi)	tarahi (盥)

母音ばかりでなく、綴音の重なる場合も同樣、旅人(タビビト)を tabito、金鍋(カナナヘ)を kanahe(鼎)、河原(カハハラ)を kahara と略する。然し他の音が省かつた結果か、または他の音が母音に轉じたために、二母音の並ぶことはある。紫宸殿(シシンデン)を sisiden、冷泉(レイゼン)を reizei、香美(カグハシ)を kaubasi、藁沓(ワラグツ)を waraudsu、郡家(グンケ)を guuke、勘事(カンジ)を kauzi といふなどであるが、かゝる場合にも、やがてまた kaubasi が kôbasi、waraudsu が warôdsu とのやうに、二母音が合して中間の一母音となることが多い。このやうに或は母音か省かれ、或は二母音が合して一母音となるなどは、いづれも發音を簡便にし、その手數を省かんがためで、これが聲音變遷上の一大原則である。しかし他の一方では、音調(ベ)を整へんがために、母音を新に加へることもある。死(シス)をシイス(弑)、詩歌(シカ)をシイカ、四時(シジ)をシイジ、引(ヒキ)をヒイキ(贔負)、木國(キノクニ)をキイノクニ(紀伊國)、襲(ソ)をソオ(噌唹郡)といふなどは、いづれも母音を長めて唱へた例である。また而(シカシテ)をシカウシテ、佐官(サクワン)をサウクワン、昨夜(ヨベ)をヨウベ、嶽(タケ)をタウゲ、設(マケ)をマウケ、八日(ヤカ)をヤウカといふなどは、いづれも新たにウといふ母音を加へたもので、これらは後に二母音同化して mauke, yauka を môke, yôka とやうに發音する。

我國語は二綴音以上の語が多くて、その各綴音はまた殆どみな母音で終つて居るから、一語の中に數種の母音を含んでゐるものが多い。さうしてかゝる場合には、これらの母音が、例へば橈(トチヲタワワ)(towowo, tawawa)、慄(チノノクワナナク)(wononoku, wananaku)、嵐(アラシオロシ)(arasi orosi)のやうに、成るべくその中の主なる母音の形に準ずるか、または繕(ツクロフ)(tsukurohu)といつてツクラフ(tsukurahu)といはず、遷(ウツロフ)utsurohu)といつてウツラフ(utsurahu)といはぬ(計・願(ハカラフネガフ)の類參照)などの如く、主なる母音に近い性質の母音に變る傾がある。これを「母音の同化」と稱へ、その細別に付ては特別の研究を要するが、つまり多數の母音が並ぶ場合には、その中の有力なる母音に引き付けられるのである。

以上述べた母音の變化は、いづれもその表はすところの意義に變化を及ぼして居らぬ、然るに此(コレ)(kore)と彼(カレ)(kare)とは、母音の相違に伴うて意味に遠近の差が生じる。一(ヒト)(hito)二(フタ)(huta)、三(ミ)(mi)六(ム)(mu)は數に於て倍加し、兄(アニ)(ani)姉(アネ)(ane)は男女の性を異にする。かくまでに意味に變化がなくとも、幾分その色彩を變へる場合もある。常(トコ)(toko)は時

(toki)の無邊性を示し、種(kusa)は數(kazu)の種別を表はす、その他草に苅(karu)といひ、木に樵(koru)といふ、動物に殺(korosu)といひ、草木に枯(karasu)といふ、金に蓄(tamaru)といひ、雪に積(tsumoru)といふなど、根本の意義に變りはなくても、それ〴〵に特色を帶びて居る。

いづれの母音も聲帶の振動より起るものであるが、そも〳〵普通の呼吸から發音の狀態に移る中間に、必ず過渡の時代がなくてはならぬ、即ち聲帶が十分閉窄せずまた開放もせられてゐない、幾分その間隙が狹くなつて居る時、この時にはまだ母音は出ないが、多少のかすれ聲(吸入をするときのやうな)が起る、いはゞ無聲から有聲に移る準備狀態であるが、これはいづれの母音にも避くべからざる前提であつて、これを稍引き延ばせば子音hとなる。それゆゑアとハとの差はその頭音の長短によるものである。この種の摩擦音は聲帶のみでなく、他の場所例へば舌の後部を上顎の後部に近づけて氣息をその間で摩擦しても出る。丁度痰を吐く時のやうな音で、この摩擦的h音を一層强めたものがk音である。k音は、舌と上顎とが全く密閉して氣息の通路を塞ぎ、その十分に漲るを待つて俄にこれを開くときに生ずる音である。かやうな譯で母音から子音に至るにもなほ幾分の連絡がある。

喉的破裂音kと喉的摩擦音hとは、このやうに近い性質のものであるから、實際上度

度相通ずることがある。我國語には喉的h音はないやうだが、ハハキに伯耆(haki)を宛て、含をhukumuとも、燻をkusubuとも、道祖神をhunadoとも、kunadoともいふなどを考へるに、或時代には幾分存在したものであらう。琉球語にも朝鮮語にも支那語にもこの音はある。

さてk音を發する場合に、同時に聲帶を振動させれば濁音gが出來る、即ち清濁の差は聲帶振動の有無によつて定まるものである。我國語は古代では清濁の區別が今日程明瞭でないらしく、また濁音で始まる語は一つもなかつた。斑(ブチ)といふ語も昔はフチと清音である(斑駒(フチコマ)など)。この濁音gと似て鼻に抜ける音が鼻音ngで、これも我國語には十分識別せられて居らぬ。昔は地名人名などを寫すに、望(mang)、相(sang)、香(kang)、鍾(sing)、通(tsung)、羊(yang)などの字音を望多(マグタ)(馬來田(マグタ)とも書く)、相樂(サガラ)、香山(カグヤマ)、鍾禮(シグレ)、融通(ユウギ)(弓月とも書く)、羊(ヤギ)のやうに濁音gに通はして用ひた。また一方から見れば、ng音は母音uの鼻に抜けたものであるから、上記の字音中のng音は盡くuに轉じて、望(mau)、相(sau)、香(kau)、通(tsuu)、羊(yau)などゝなる。それ故母音と濁音と鼻音とには共通の點がある。舌と上顎との間で出來る摩擦音がs、破裂音がchで、舌端と上顎前部との間の破裂音がtで、摩擦音はtsである。それ故s ch ts三音は屢相通ずることがある、例へば放(hanatsu)

natsu)と離(hanasu)、窄(subomu)と窄(tsubomu)、八雲立(tatsu)を八雲刺(sasu)など、また夕立(yuhu-ta-chi)、嵐(ara-si)、風木(chi-gi)、東風(ko-chi)、疾風(haya-te)のchi, si, teは、みな風の義で、その他次のやうな例もある。

皀角子	saikasi	saikachi
消	kesu	ketsu
次	tsugi	suki

t音と同じ、位置で出來る鼻音がn音で、また舌の位置はt音と同じで、其間隙から聲帶の振動を經た氣息を出すとr音になる。それ故tnrの三音は相通じて用ひられることがある。

(1) nrの相通ずる例　萬葉に情進をサカシラと讀ませ、人名に仲滿をナカマロと讀むなどは、進(sin)をsira、滿(man)をmaroに通はせたものである。なほ

雲箇	(un)	uru-ka
訓覓	(kun)	kuru-beki
散樂	(san)	saru-gaku
稻荷	(ni)	ina-ri
平群	(gun)	he-guri
播磨	(han)	hari-ma
掃部	(kani-mori)	ka-mon
件	(kudari)	kudan
殿	(siri-gari)	sin-gari

(2) tnの相通ずる例　字音で「內」を內部(ナイブ)・參內(サンダイ)、「男」を男子(ダンシ)・男女(ナンニョ)、「女」を女房(ニョウバウ)・女史(ジョシ)など兩樣に用ふるのもその例で、なほ

椎田	(ta)	sihi-na
空	(muna)	muda
時	(sina)	sida
丹比	(tan)	tadsi-hi
羅	(wanaku)	wadaku
己	(onore)	odore
待難	(kane)	machi gate

(3) rtの相通ずる例　滾をタギル(tagiru)ともいひ、幾何をイクラともイクダ

ともいふ。安達はもと安太多良（アタタラ）といふ朝鮮地名から起り、轉じてアダチとなる。

その他なほ

達磨　(tatu)　daru-ma

出來　(rai)　siyut-tai

ハ行の古音がpまたはfの唇音であつたことは、既に爭はれぬ定說である。まづ(一)ハ行の濁音バ行が唇音bであるといふこと、(二)地方の方言中にまだこのハ行にfの古音が殘つてゐること、(三)琉球方言にpfh三音が並び行はれてゐること、(四)字音を假りて寫した古地名などにはハ行にP音を宛てゝゐること、例へば邑樂（オハラギ）、愛甲（アユカハ）の邑の朝鮮音はŭp甲はkapで、ニホトリの倭字鴉は入（ニフ）の字音nipを假りて居る、(五)ハ行音はよくワ行マ行に轉じるが、このwm兩音とも唇音である、例へば僅をhatsukaともwatsukaとも、走をhasiruともwasiruとも、蟬をsemiともsebiとも、また字音でも草木（サウモク）・木石（ボクセキ）・馬關（バカンツ）・對馬（シマ）の類がある。なほ

周章　ahatsu　—— awatsu

母　haha　—— hawa

聯　hisokagoto —— misokagoto

鳶　tomi　—— tobi

大領　ohokubi　—— okumi

蝨　abu　—— amu

蒲　kaba　—— gama

かやうな譯ゆゑ、ハ行の古音は必ずpまたはfであつて、それが漸次變つて今日のh音となつたのであるから、研究者はいつもこのことを心に留めて置かねばならぬ。以上あらまし五十音についての談を終つたが、いま一つ付け加へて置きたいのは促音のことである。促音は普通ッ字を片寄せてこれを記すが、全體促音は獨立の一音でなく、母音からktpなどへ移る際に起る餘韻である。母音とktpなどとが並ばなければ起らぬもので、その性質もまた前後兩音の異るに連れて變る譯である。もと國語に促音はないから、入聲の字音の場合にも、母音を加へてこれを二綴音に改めた。地名人名等を見るに、

益必　(yak)　(hit)　yake-hito

物理　(mot)　moto-rowi

曰理　(wat)　wata-ri

雜物	(sap) (mot)	sahi-mochi
半月	(war)	hani-wari

然るに漸く字音を初とし國語にも、專(モハラ)をモッパラ、全(マタク)をマッタク、眞直(マスグ)をマッスクなどいふやうになつた、但しこれらの場合の促音は、必ず次に來る綴の頭音に準ずるもので、一方(イッパウ)一向(イッカウ)一統(イットウ)など一がip, ik, itと變つて發音せられるのである。

さて音の脫けることも、音の同化することも既に述べたが、いま一度子音母音に通じていはう。母音の同化と同じやうに、一語の中でnmなどは自己と同音を引き付けることがある。例へば

算用	(san you)	san-niyou
因緣	(in en)	in-nen
三位	(sam wi)	sam-mi
眞中	(ma naka)	man-naka
善惡	(zen aku)	zen-naku
雪隱	(setsu in)	set-chin
探幽	(tan yuu)	tan-niyuu

觀音	(kuwan on)	kuwan-non

なほ備後をbi-n-go、見事をmi-n-gotoなどゝ、n音を新たに加へることもある。

音の脫ける場合を、これまで多く音便と稱へてゐた。今これを分類して見ると、

(1) k音の脫ける場合　暑き日をアツイヒ(アッイヒ)といふなどの例は頗る多い、祝庫(ホギクラ)はホグラとなり、今はこれをホコラ(祠)といふ。その他

呼吸	(iki huki)	i-buki
刃	(yaki ha)	yai-ba
晦	(tsuki gomori)	tsu-gomori
幸	(saki hahi)	sai-hahi
大分	(oho kita)	oho-ita
埼玉	(saki tama)	sai-tama
錢卷	(zeni maki)	zen-mai
讀經	(doku kiyau)	do-kiyau
當麻	(tagi ma)	tai-ma
素麵	(saku men)	sau-men

(2) r音の脱ける場合　折敷(片木作の角盆)は、もと枝葉を折敷いたからの名で、r音の脱けたものである。その他

佃	(tsukuri ta) tsuku-da
探女	(saguri me) sagu-me
拝	(worogamu) wogamu
粮	(kari te) kate

(3) m n音の脱ける場合　鼻音は聲帶の振動を伴ふから、その脫落する際には、必らずこの性質を次の子音に傳へて、これを濁音とする。國處(kuni-ko)が陸(kuga)、止及(tsumi-ha)が鍔(tsuba)となる類で、なほ

樺	(kani ha) kaba
硯	(sumi suri) su-zuri
弾	(yumi kake) yu-gake
網引	(ami hiki) a-biki
飲戸	(nomi to) no-do
金打	(kane uchi) ka-ji

文筥	(humi hako) hu-bako
國栖	(kuni su) ku-zu
櫨	(hani si) ha-zi
髪掻	(kami kaki) kau-gai

(4) h音の脫ける場合

獵人	(kari hito) kari-udo
四人	(mesi hito) mesi-udo
兄	(se hito) se-uto
大鋸	(oho ga) o-ga

(5) s音は同年(オナジトシ)が ona-i-dosi となるやうな場合もあり、また春雨(ハルアメ)が haru-s-ame 村雨(ムラアメ)が mura-s-ame 氷雨(ヒアメ)が hi-s-ame となるやうに、新に加はることもある。

第三章　單語の構造

音韻のことは一通り述べた積りである。これらは勿論單語の組織構造を研究するに適用すべきものであるが、そも〳〵語原の問題は容易なるが如くで、その實誠に六

ケ敷いことである。我國の學者は貝原益軒すらも「和語の解釋は謎を解くが如し」といつて、餘程輕く見てゐるやうであるが、語原學の大家スキート敎授が「人はみなderive(語原を解く)をdrive(騎乘)する如く容易く思へり」と冷評してゐる通り、易きに似て易からざる語原の問題は、決して音韻の延約などばかりで解すべきものでない。五十音圖の縱橫を勝手に延べたり縮めたりしてゐると、しまひには燕(ツバクラ)が鷹(タカ)になり、陽炎(カゲロヒ)が霧(キリ)になるやうな滑稽が起る。語原の解釋はかへすがへすも輕率にすべきものでない。

(一)漢語から出て純粹の國語のやうに見えるもの

笊(ザル)はちよつと見ると國語のやうであるが、實は字音笊籬(サウリ)の略されたもので、匙(ハンザフ)は半挿(ハンサフ)の音、紙筆文錢(カミフデフミセニ)などもまた簡筆文錢(カンピツブンセン)の字音から出てゐる。[二]支那の文化が輸入せられてよりこのかた、漢語はもとよりのこと、かやうに漢語の國語化せられたものも多く行はれるやうになつた。

ぼけ(木瓜)　こうたう(公道)
むくれじ(木欒子)　りん(鈴)
しつくゐ(石灰)　きやしや(花車)
あんくわ(行火)　がんじよう(岩乘)
ほいたう(陪堂)　ちよく(鍾)
しやくなげ(石楠草)　もつさう(物相)
うこぎ(五加)　とうしみ(燈心)
きんとん(橘飩)　あんどん(行燈)
さじ(茶匙)　うゐらう(外郎)
おくこふ(億劫)　やぎ(羊)

世間の人は多くこれらの語が字音から出てゐることを知らずに使つて居る。また所謂「重箱讀」といふ類から起つたもので既に一語をなしてゐるもの、例へば貝(カヒ)、鮒(フナ)、魚(イヲ)、續飯(ソクイヒ)、湯婆(タンポ)のやうなものもある。このやうに漢語は深く國語の中に混じてはゐるが、松村博士が「東洋學藝雜誌」に連載せられてをるやうに、あまりこの方面にのみ深入りして、國語の語原を多く漢語に求めようとすることは、斷じて誤である。

(二)純粹の國語に宛字をしたもの

ウラヂヲストックを「浦鹽」、コンクリートを「混凝土」とするなどは、宛字でも巧妙なものであるが、全體この宛字といふものは廣い意味からいへば、漢字渡來のその時から行はれてゐるのであつて、中には隨分見分けにくいのもある。飯の菜は副(ソヘ)の宛字で、野

菜の「菜」ではない、手師（テシ）・鑄物師（イモジ）の「師（シ）」は字音であるが、醫師（クスシ）の「師（シ）」はクスシといふ動詞の活用クスシのシに宛てたものである。また「左樣」左の如し」などの「左」は指示代名詞さの宛字で、左右の「左」でない。古手（フルテ）の「手」はタヘ（栲）、行手（ユクテ）繩手（ナハテ）（畷）の「手」はチ（道）土手（ドテ）の「手」はテイ（堤）の宛字である。

沙汰（サタ）　（定（サタ））
才覺（サイカク）　（才（ザエ）の覺（オボエ））
出張（シュッチャウ）　（出張（デバ）る）
荒增（アラマシ）　（有らまし「行末の豫定」）
數寄（スキ）　（好（スキ））
同斷（ドウダン）　（同（オナ）じ理（コトワリ））
談合（ダンガフ）　（談（ハナ）し合（ア）ふ）

（三）漢語を直譯して出來た語

黃金をコガネ、白金をシロガネ、言葉をコトノハ、蒼鷺をアヲサギ、烏扇をカラスアフギといふなどの類で、動植物の名などに多いやうである。

蒼生　あをひとぐさ
繩墨　すみなは
老鴉瓜　からすうり
拍手　かしはで

この他、字形及び字註から譯語を造る一種がある。これは宮崎法學博士の創見で、語原學上の大發見といつてよろしい。まづ字形から譯語を求める例についていへば、我國の古俗には婿取（ムコトリ）があつて嫁入（ヨメイリ）がない、然るに漢字「娵」の意味を邦語で言ひ表はす場合に、これをどうしたかといふに、もと我國にない事柄故、新しく語を造らねばならぬ、それで仕方なしに、この文字を兩分してこれを直譯し、女取（メトル）と定めたのである。導をミチビク、舶をシロヲ、籮をイリヨネ、潮をアサシホ、汐をユフシホと讀むのも同樣である。次に字註から譯語を造つた例も同じことで、國語ナクは人間にも鳥獸にも昆蟲にも通じて用ふる語であるが、漢字では鳴とか泣とかそれ〴〵區別して使ひ、ことに鳥については「囀」といふ文字がある。これをサヘヅルと讀むのは、その字註「鳥鳴也」の朝鮮訓サイ、ウルから轉じて新に一語となつたものだらうと、これも同博士の新說で、掌をタナゴ、ロ（手心）、堞をヒメガキ（女墻）、桑をクハ（食葉）といふなども同例である。この字註訓については、義門も似た考をもつてゐたらしく、狒の訓ヒイルは字註「飛入」

の音訓混讀であらうというてゐる。この字註訓と反對の事實は、我國で新に造つた所謂倭字の中の、十字街に辻(ツヂ)、神木に榊(サカキ)などの新字を宛てたことで、嫡妻に妬(ウハナリ)(女君)、後妻に嫌(ウハナリ)(妾女)字を用ふるのもまたさうである。

働(ハタラキ)(人動)
凪(ナギ)(風止)
樫(カシ)(堅木)
襷(タスキ)(擧衣)
畑(ハタ)(火田)

(四)外來語

わが大和民族は古來幾多の人種と接觸した。熊襲、蝦夷、三韓を初とし、隋唐よりこのかた絶えず支那とも交涉し、近世に至つてスペイン、ポルトガルを魁として、歐米の、諸國いづれも好を通ずるやうになつた。これら內外の諸人種とはいづれも多少の言語を交換して居るが、文化の程度の高い方から流れ出す言葉の方が多い。例へばアイヌ語からは厚子(アツシ)(attush)海豹(アザラシ)(?)、オンコ(?)、獵虎(rakko)など極少數の語が這入つてゐるばかりであるが、アイヌ語の方へ渡つた國語の數はなか〳〵多い。

kambi-sosh (紙草紙)
menoko (女の子)
tonoto (殿の乳)
pancho (番匠)
pasui (箸)
nupuri (登)
shitoki (粢餅)
tuki (坏)
maratto (稀人)
kungi (釘)
ataye (價)
ratchako (蠟燭)
ondori (踊)
kosonde (小袖)
kongane (黃金)

書物
婦女
酒
大工
箸
山
餅
盃
客
釘
代價
蠟燭
踊
和服
黃金

peko　仙臺地方の方言牛

昔の支那、朝鮮は文化に於て當時の我國よりも進歩して居つたから、言語も彼等から借りたものが多い。この中漢語の方は數も夥しく、また前にも述べたことがあるから、今はいはぬ。朝鮮語も隨分澤山來たことゝ思はれるが、もとかの語は我國語と同一系統のものであるから、本來同一の語原のものと、玆に論じて居る借用語との間に區別を立てることが甚だ困難である。しかし味噌(一に高麗醬といひ和名抄に未醬と見え、鷄林類事には密祖とあり)、鷹の古名倶知(仁德紀に見ゆ)などは確に朝鮮傳來の語で、白石の「東雅」に朝鮮語として擧げた語の中の熊、櫻桃、百合、絡楾、甕翡、城、寺、鶉、瓦なども、多分さうであらう。その他

犂(カラスキ)	kara-suki	枳(カラタチ)	kara-tachi
碓(カラウス)	kara-usu	唐薺(カラナヅナ)	kara-nadsuna
連枷(カラサヲ)	kara-sawo	棕(カラナシ)	kara-nasi
機(カラクリ)	kara-kuri	鰈(カレヒ)	kar-ehi
紅(クレナヰ)	kure-nawi	吳桃(クルミ)	kuru-mi

これらは言葉として直接傳はつたものでないが、カラを冠してゐるのはその品物が

彼地から渡來したか、またはかの地の產の優れてゐるがためかである。この中鰈(カレヒ)はカラエヒの約で、機(カラクリ)のクリの語原は不明である。

佛敎傳來の結果、梵語(ボンゴ)も尠からず通用語となつてゐる。

鉢(ハチ)	pâtra
斑(マダラ)	maṇḍala
夜叉(ヤシヤ)	yakṣa
奈洛(ナラク)	naraka
馬鹿(バカ)	baka
頭陀(ヅダ)	dhuta-aṇga
旦那(ダンナ)	dâna-pati
塔(タフ)(蘇塔婆の略)	stupa
旃檀(センダン)	candana
刹那(セツナ)	kṣana
瘡(カサ)	khasa
痘痕(アバタ)	abbuda

近世泰西諸國人來朝の結果齎した外來語の數は更に夥しいものである。これらの中、例へば鴉片のやうなものは英語opiumの支那音譯で、會社の名に某公司といふのがある、その公司の「公」は公班牙の略で、これも英語companyの音譯であるから、これらは外國語が支那を經て間接に傳はつたのである。所謂南蠻人は南洋を經過して我國に來航したホルトガル、イスパニア、オランダ人の總稱で、これらの諸國人は最も早く我國に渡來した西洋人であるから、外來語中にもこれらの諸國語が一番深く行き渡つてゐる。

端艇	ホルトガル語	bateira
硝子	〃	vidro
天鵞絨	〃	veludo
莫大小	イスパニア語	medias
鐵葉	オランダ語	blick
咱夫羅	〃	safraan
ヅック	〃	doek

その他英佛獨語には、例へば次のやうな語がある。

麥酒	ドイツ語	beer
ガーゼ	フランス語	gaze
毛布	英語	blanket
バケツ	〃	bucket
刷子	〃	brush
チヨツキ	〃	jacket
ボール紙	〃	paste board
コークス	〃	cokes

(五)比喩法に基いて出來た語

はじめ駱駝をラクダノウマといつた。これは人や荷物を乘せることが馬と似てゐるからであるが、どんな場合にもまづ他の物と比較して、似てゐる點があればこれを捕へて命名する、即ち全く新たに名を付けず、成るべくありきたりの名稱で間に合はさうとする、經濟的の方法が廣く行はれてゐる。扇の要は蟹の目と似てゐるからの名で、鼈は鱗に喩へ、橋・箸・階はいづれも物を渡すことに於て同一である。管の雁首、刀の鯉口、鰭と唐墨、みな同例である。

鞘（サヤ）……劒屋（サヤ）
蛤（ハマグリ）……濱栗（ハマグリ）
疣（イボ）……飯粒（イヒボ）
鬮（クジ）……串

裏表（ウラオモテ）はもと人類の顔と心のことで、オモテは面（オモ）つ邊（ヘ）の約、羨（ウラヤ）し・心淋（ウラサビ）しなどのウラは心である。その他棟（ムネ）（胸）、窓（マド）（目處）、桁（ケタ）（肩）、肱木（ヒヂキトホソ）、樞（戸臍）、袖（ソデ）（衣手）などもみな人體に比喩した例でその反對に鉢巻（ハチマキ、チアヘセ）鉢合などは頭を鉢に較べ、爪（ツメ）（手芽）、腹（ハラ）（原）、胸（ムネ）（身根）なども、それぞれ他の語から由來してゐる。

（六）歸納的に見出される語

二個以上の語が複合した場合には、大抵その原義を失ふものであるが、これらは同種類の語を多く集めて、歸納（キナフ）的（テキ）に見出すことが出來る。例へば葱の古名キを（ネギ（根葱）、ワケギ（分葱）、アサツキ（淺葱）、アサギ（淺葱色）、モエギ（萠葱色）の内より抽き出し、鹿の古名カをシカ（牡鹿）、メカ（妻鹿）、カノコ（鹿子）から見分ける類である。なほ左に數種の例を掲げて參考とする。

一）容器の古名ケ及びそれと類似の音を含む語

桶（麻笥）　wo-ke
靫（弓笥）　yū-ki
盃（瓦笥）　kahara-ke
箱　ha-ko
笭　hu-go
缶　hoto-ki
鼎（金鍋）　kana-he
釣瓶　tsuru-be
齊瓮　ihahi-be

二）容器の古名ベを含む語

櫛笥　kusi-ge
木笥　tsu-ki
盆　hira-ka
甁　mi-ka
瓰　hisa-go
籠　ka-go
鍋（魚瓮）　na-be
瓰　huku-be
忌瓮　imu-be

三）蟲の古名（？）ミを含む語

蚤　no-mi
蛇　he-mi
蝨　sira-mi
衣魚　si-mi

四）鳥の古名シ（？朝鮮語はsai）を含む語

雉　kigi-si
烏　kara-su

時鳥 hototogi-su

(五)果實の名ミを含む語

米 ko-me
梅 u-me
黍 ki-bi

(六)木の名キを含む語

麥 mu-gi
荻 wo-gi
檜 hi-no-ki
椿 tsuba-ki
柳 yana-gi

この他海鼠、金海鼠、煎海鼠、海鼠腸などからその本名のコであることを知れば、章魚のコも同語であらうと推量せられ、また マヤ(兩下)、マデ(兩手)、マカヂ(兩舵)などのマに「兩」の義のあることから推して、マヲトコ(密夫)のマをも同義に解くなどの例もある。

(七)語の省略

鶯 ugubi-su
豆 ma-me
桃 mo-mo
菜莧 gu-mi
竹 ta-ke
杉 su-gi
槻 tsu-ki
薄 susu-ki
榎 e-no-ki

輕便主義即ち勞力の經濟上から、語は屢その一部分を省略せられることがある。カゲン(加減)をカン(燗)、フキカヘシ(吹返)をフキ(袘)といふなどで、その他ヲヒト(男人)をヲヒ(甥)、メヒト(女人)をメヒ(姪)といふのも同例である。なほ

浪人(浮浪人)
寄席(人寄席)

酢をスモジ、髪をカモジ、莖漬をクモジといふ類の女房言葉もまた一種の省略法と見ることが出來る。

しやもじ 杓子
おこは 强飯
おつけ 浸汁

醬油(吸物の下地)
寒天(寒晒心太)

ひもじ 饑
ひともじ 葱(キ一文字なれば)
たもじ 鮪

(八)接頭語を冠れる語

貴しは太しに、菩ふは加ふに接頭語タの冠さつたもので、この類もまた尠くない。

いーます 坐
いーさかふ 爭
さーまよふ 迷
たーよる 緣
たーのむ 祈
しーなふ 萎

し・だる　垂（タル）　た・すく　助（スク）

（九）類推作用と語形

南（ミナミ）をミンナミともいふは、東（ヒムカシ）をヒンガシといふのに類推（ルイスイ）したので、同じ方位の名であるから、これより推してかれに及ぼしたものである。假名をカンナといふから、眞名（マナ）をもマンナといひ、左（ヒダリ）のリを右（ミギ）にまで付けてミギリといひ、意（コヽロハセ）（心馳）があるから、顏（カンバセ）（顏馳）。腰（コシハセ）（腰馳）までが出來る。この他

（イ）有るを無しといふ場合

幼（テサナシ）は「長（テサ）なし」丞（カタジケナシ）は「難氣（カタケ）なし」の義であるから、ナシの意は聞えるが、荒々しきことを荒氣なしといふなどのナシは、何の意味もなく他の語形（覺束（オボツカ）なし本意（ホイ）なしなど）に類推したもので、なほ次の樣な例もある。

骨（コチ）なし　切（キツ）なし
滿遍（マンベン）なし　端（ハシタ）なし
いわけなし　あどけなし
物體（モツタイ）なし　いとけなし

この反對に「怪しかる」を「怪しからぬ」といふ類もある。

（ロ）接尾語の類推

動詞を作る接尾語の中類推せられるものがある。例へばナフの如きもの。

假（オギ）なふ（補）　賂（マヒ）なふ
甘（アマ）なふ（承諾）　咒（マジ）なふ
いざなふ　伴（トモ）なふ
ト（ウラ）なふ　商（アキ）なふ
荷（ニ）なふ　罪（ツミ）なふ
諾（ウベ）なふ　音（オト）なふ（訪）

老ばむ」「黃ばむ」「氣色ばむ」「馴ばむ」「塵ばむ」などのバム、味はふ」「艶はふ」「染はふ」などのハフもまたこの類であらう。

（ハ）動詞活用の類推

他の品詞が動詞に轉じる場合の活用は、その語の語尾を四段に類推（ルイスイ）して活かせるものもあり、又は他の動詞の語尾に類推する場合もある。

（a）その語尾を四段に活用させる例

しやうぞく（裝束）　はかりごつ（謀）

れうる（料理）　さいしく（彩色）
ひとりごつ（獨言）　まつりごつ（政事）

(b) フ、ブ語尾に類推する例

かぞふ（數）　てきたふ（敵對）
おとなぶ（大人）　ふるぶ（古）
ひなぶ（鄙）　さとぶ（里）

(c) ク、グ語尾に類推する例

かたぐ（肩）　まくらく（枕）
つなぐ（綱）　わなく（羅）
またぐ（股）　かづらく（蘰）

(d) ル語尾に類推する例

しつける（濕氣）　いほる（庵）
しやくる（扚）　くもる（雲）
やどる（宿）　うねる（畦）
くびる（頸）　げびる（下卑）

すぢる（筋）　かげる（影）
つめる（爪）

(e) ム語尾に類推する例

かさむ（層）　はらむ（腹）
りきむ（力）　つまむ（爪）
そばむ（側）　もくろむ（目論）

他の品詞が形容詞に轉じるのもやはり類推である。

おとなし（大人）　きいろし（黃色）
ねつい（熱）　しかくい（四角）
しるし（知）　ひとし（一）
しふねし（執念）　ひもじい（饑文字）

言葉の組み立の話は決してこれで盡きた譯ではないが、ざつとこれ位でとゞめて置いて、こゝに少し比較研究（ヒカクケンキウ）の有益なことの例を述べて見よう。既に總論の中にもいうた通り、我等學術の研究者も常に世界の大勢といふことを忘れてはならぬ、東海道五十三次を旅するだけにも、水盃をして別れた時分と、飛行機が帝都の大空を飛び廻

る今日とは、時代が違ふ、人間の頭が差ふ。この結構な便利な時節に生れてゐながら、研究の方法に於て、材料の範圍に於て、徳川時代の國學者の後塵を拜してゐるといふやうなことでは、時代後れと譏られても辯解の辭はあるまい。またそればかりでない、昔の人の中には、既に一歩を進めて、梵語・朝鮮語などを調べて、我國語の音韻語釋などに應用を試みたことさへある。これらを思へば、今日の若いものは大いに奮發するところがなければ、面目が立たぬ次第である。

本居宣長翁は國學の大家であるが、その古事記傳に「ナミダ」の語源を泣水垂の約とされてゐるのは誤で、これは目水と解すべきものである。即ちナは目の義の古語である。今このやうな例を擧げるのは、決して古人の誤謬を發いて快しとするのではないのみならず、翁の解釋はその當時に於て、蓋し出色のものであると思ふ。しかし今日は時世が違ふ我等は翁を尊敬することに於て、敢て他人に讓らぬつもりであるがさりとて徒らに古人の學説を墨守するのみが能でない。求むべきは大にこれを求めて、一歩は一歩より眞理に近かうと務めねばならぬ。これはまたやがて先輩の遺業を繼續するの道であつて、我等は濫りに異説を立てゝ新しきを衒ふのではない。

涕のナを目の義の古語であるといふのは、朝鮮語と比較しての結果で、朝鮮語mun-mur(涕)は、mun(目)とmur(水)との複合名詞である。即ち朝鮮語mun(目)は國語mと相對するもので、その鼻音の重なることは、國語mi(身)を朝鮮語でmom(身)といふやうな例もあり、國語でもuma(馬)ume(梅)をmu-ma mume ともいふから、別段怪しむに足らぬ。琉球方言で「見る」をmunといふのもまた大に參考となる。かやうに朝鮮語との對照は大に國語の解釋に新しき材料を與へるものであるから、左に一項を設けてこれを説明して見よう。

(十) 語釋の比較研究

(1) 雉(キジ) 雉の古名はキギシで、それが約まつてキジとなつたのである。さうしてキギとはその鳴聲に擬したものに相違ないが、語尾のシがどうしても分らぬ。然るに朝鮮語を見るに鳥をsoi-といふから、キギシのシもこれと同語かと想はれる。さうすると烏(カラス)のスもさうであらう。カラはkiri-kiri-kiri-と鳴くからである。その他鶯(ウグヒスホト・ギス)・時鳥などのスもこれと同樣であらう。

(2) 家鴨(アヒル) 家鴨は足廣(アヒロ)の義であるといふのが從來の説である。しかし朝鮮語で鴨をoriといふから、アヒルのアヒは家鴨の轉で、ルを鴨の古語と見るべきものであらう。

(3) 鳩(ハト) 鳩の朝鮮語はpi-tărkで、そのtărkは國語トリに當る語であるから、ハトは、ハトリの下略であることが分る。

(4) 竹(タケ) 朝鮮語で竹をtaiといふから、タケのケはこれを別けて考へるべきもので、その意義は多分「木(キ)」であらう。昔は草木の別なくこれをキと稱へたもので、麥(ムギ)・萩(ハギス)・薄(キ)などいくらも例がある。

(5) 瓢(フクベ) 朝鮮語pak(瓢)は瓢(フクベ)のフクに相當する語であるから、殘りのベはこれをナベ(鍋)、ツルベ(釣瓶)などのベと同じく、容器の古語と見るべきものである。

(6) 鶉(ウヅラ) 鶉は朝鮮傳來の語ともせられて居るが、今日の朝鮮語ではこれをmoi-chŭrakiというてゐる。このmoiは山の義で、chŭrakiはtărk(鳥)の轉であるから、つまり山鳥といふことである。それ故國語ウヅラのツラは、ともかくトリ(鳥)の轉であることだけは知れる。

(7) 神南備(カンナミ) 神南備は神籬(ヒモロギ)と共に古代に於ける靈域(レイキキ)で、神を祭るところであるが、その語義は今に至るまで明瞭でない。然るに朝鮮語「木」をnamuといふことより考へると、神南備は神木の義で、靈樹崇敬の古俗の遺名であることが分る。

(8) 陵(ミサヽギ) 陵は御狹狹城の義であると說き來つてゐるが、これも朝鮮の古語sasi(城)の轉じたものと見る方が穩當であらう。

(9) 日(カ) 二日(フツカ)・三日(ミツカ)のカは國語だけでも「日」の義といふことは分るが、朝鮮語hăi(日)を參照すると一層明瞭になる。但し朝鮮語h音は必らず國語でk音となる定であるからhăiは國語に直せばkăiとなるのである。

(10) 酒(シル) 酒の古名をシルといふのは、朝鮮語sur(酒)と同語である。酒臺をシリサラと訓じ、また醨をモソロといふなども、これから推せばよく分かる。

(11) 前妻(コナミ) 前妻をコナミと呼ぶことは、頗る解釋に困むところであるが、これも朝鮮語さへ參考すれば、すぐ分かることである。朝鮮語kŭn-ömiは嫡室の義で、もとは「大婦」といふことである。大小を以て妻妾の區別を立てる例は、何處にもあることで、此場合にもコナミは前妻でなく、實は本妻を指したものといふことが分かる。新撰字鏡にはコナミに婠の字を宛てゝあるが、これも女君の合字で、多數の妻妾中の君といふ義をとつたものである。

(12) 後妻(ウハナリ) 前妻に對して後妻をウハナリといふことも、甚だ難解の語であるが、これは「上婦」の義で、ウハナリのウは「上」、ハナリは朝鮮語myönari(婦)にあたる。上下と前後とは、古代多く同義に用ひられたもので、上婦は即ち後婦のことである。

(13) 探湯(クカタチ) 上代に多く行はれた神斷の一種であるこの裁判法は、有名なものであるが、その語義に至つてはいまだ全く不明である。これもその實朝鮮語系に屬する

もので、朝鮮語「湯」をkuk「探」をchatといふ。即ちクカタチは湯を探るの義である。

(14) 童男　日本武尊が川上梟師に對へて、「吾は是大足彦天皇之御子なり、名をば日本童男(ヤマトヲグナ)といふ」と宣へる童男(ヲグナ)の語義は如何。古事記に倭男倶那王(ヤマトヲグナノミコ)と見えてゐるのと比較して見ると、ヲグナのヲの男であることだけは察せられるが、グナのことは、宣長翁の古事記傳にさへ何等の説も見えて居らぬ。この語を朝鮮語の側から觀察して見ると、人(ヒト)といふ意義らしく思はれる。蒙古語で人のことをkunといひ、朝鮮語では今日これに軍(kun)の字を宛てゝ、輜軍(kyo-kun)、賃軍(sak-kun)などゝいうてゐるが、何れも人の義の古語である。この kun(人)といふ語は可なり廣く東洋に分布してゐるから、この男倶那(ヲグナ)と申す御名も「男の人」と解し申してはいかゞかと考へるのである。

第四章　假名遣

假名遣は實に國語學上の大問題であつて、將來ます〳〵發展せうとする我帝國語のためには一大難關である。しかし何ゆゑにこの假名遣といふものが起つたかといふ原因にいたつては至極簡單で、一言にして盡せば、文字と言語との進歩が併行せぬ結果で、言語の方は明治大正と移り行くのを、文字だけが幾百年の古に彷徨うてゐるからである。言語の變遷は嚴密にいへば一時も休む間が無い。然るに、これを寫す文字が固定して居るから、いつしか兩者の間に間隔が出來る。例へば英語 right (權利)は Vrag (統御)といふ語根から出た語で、アングロサクソン語では riht、ドイツ語では Recht と、いづれも喉音を存してゐるが、英語では聲音が變化して、其喉音を失ひ、ライトと發音しながら、綴字だけはやはり喉音 gh を存してゐる。葛は大和國栃の名産で、そのクニスを名に負うたものであるから、佐行スの濁音であり、草鞋は藁鞋の省略であるから、多行チの濁音を用ひる。今日實際の發音ではジヂ、ズヅの區別を立てないが、文字に表はす場合にはこれを書き分けようとする。かやうに現代の生きた發音から離れて、文字だけを幾代も前の世に持つて歸らうとする、保守的好奇心から起る努力を假名遣といふのである。それ故正當に假名遣を了解するには、勢歴史的にその本源を探らねばならぬ。挿は第三十九轉齒音入聲二等洽の韵であるからサフで、相は第三十一轉齒音平聲四等陽の韵であるからサウであると、一々韻鏡に照して見ねば字音の假名遣は分らぬ。かやうな手數は專門の學者には必要であらうが、一般の人々にとつては非常に迷惑なことゝいはねばならぬ。假名遣改良説の唱へられるのも、羅馬字論の起るのも、まことに無理ならぬことである。しかしこの面倒な假

名遣も、主義としてこれを國民教育の上に施すといふ以上は、飽くまでもその實行を期せねばならぬ。

さてこれまで行はれてゐる國語及字音假名遣の方法を見るに、紛らはしい假名の中、字數の少い方を數へ擧げて、これを諳誦し、多い方を類推するといふ仕方であるが、これは一見甚だ簡明のやうで、實際の効果はあまり擧らぬやうである。全體言語に關する事項は、獨り假名遣のみでなく、凡て箇々別々に練磨の功を積んで遂に大成すべきものであつて、概括的の規則などは役に立つものでない。それ故假名遣に於ても全體に通じてよりは、寧ろ一つ〳〵について何とか工夫せねばならぬ。

(一) 國語の假名遣

前に述べた通り、假名遣はもと〳〵專門學者の領分に屬する仕事であるから、これを習得する方法も亦勢學術的たるを免れない。雉の古名はキギシ、檐の古名はハニシ、ムラジ(連)はムラヌシ(村主)から轉じたものであるから、そのジの音はシの濁音を用ひ、これに反して、カヂ(鍛冶)はカネウチ(金打)の約、カヌチから轉じ、カウヂ(麹)はその古名カムダチから轉じたものであるから、チの濁音である。またウヂ(氏)をチの濁音とするのは、氏は人の出生を示すもので、漢字の氏も出と同根であるやうに、もとイヅ(出)の義であるから、ヂを用ひるのである。このやうに各語の假名遣は、その語源に溯つて音韻の變化、意義の變遷などを究めて、而して後これを定めなければならぬ。これが假名遣研究の唯一の方法である。從つて世間に普通に行はれてゐる、語例の少きものを記憶して、その他を類推せしめ、又は記憶歌を作つて諳記を便にする方法などは、贊成することが出來ない。語例の少いものを諳記して他を類推するのも、一應は便利なやうであるけれども、實際的のものでなく、又決して完全な方法でない。要するに假名遣は個々の語源に溯つて調べる外、全體を總括した簡單な規則はない。勿論初學者には斯ういふやうに一々語源に立ち入つて研究することは困難なことに違ないが、これは歷史的假名遣を用ふる以上、已むを得ないことで、假名遣は元來專門的のもので、一般の人に課すべき性質のものでないのであるから、これを學ぶにも順序として必ず專門的に研究しなければならぬ。即ちヲガム(拜)は折れかゞむの約、ヲロガムより轉じたものであるから、その假名はヲで、トモエ(巴)は鞆の繪の義であるから、エの假名である。またカワク(乾)は氣湧くの義、コトワリ(理)は事割の義であるから、その假名はいづれもワで、クレナヰ(紅)は吳の藍の義で、モトヰ(基)は元居の義であるから、ヰの假名である。またワラヂ(草鞋)は藁鞋の轉、ヲヂ(伯叔父)は小父の義であるから、ヂの

假名であるといふやうに、一々の語に就いて、その語源に立ちかへつて覺えなければならぬ。要するに假名遣は個々の語について研究するより外道のないものであるけれども、また一の語から種々に分出し、或は他の語と合成して更に幾多の語をつくる場合も多いから、これ等の語は意味の上にも外形の上にも多少の關係がある。從つてこのやうな種類の語は類を推してその假名遣を知ることが出來る。例へば

ヲ(小)——ヲ(尾)——ヲチ(遠)

この三語の如きは、意義の上に多少共同の點があるから、同じくヲの假名であることが知れる。さうしてこのヲ(小)からヲヂ(伯叔父＝小父)、ヲバ(伯叔母＝小母)、ヲトメ(少女＝小身)、ヲシム(惜)など、ヲ(尾)からトヲ(十＝十尾)、ヲフ(終)、ミヲ(澪＝水尾)、サヲ(竿＝小尾)、ヲ(丘)などが出、またミサヲ(操＝身竿)は竿から、ヲカ(岡＝丘處)は丘から分れてゐる。ヲチ(遠)からはまたヲトトシ(一昨年＝遠年)、ヲトトヒ(一昨日＝遠日)などが出てゐる。よつてこれ等一類の語はみなヲの假名であることが類推せられる。

小
- ヲヂ（伯叔父）
- ヲバ（伯叔母）
- ヲトメ（少女）

ヲ
- ヲーミナ（女）
- ヲーシム（愛）
- 尾
  - トーヲ（十）
  - ヲーフ（終）
  - ミーヲ（澪）
  - サーヲ（竿）
  - ミーサヲ（操）
  - ヲ（丘）
  - ヲーカ（岡）
- 遠
  - ヲトトシ（一昨年）
  - ヲトトヒ（一昨日）

またワ(輪)は圓く圍む意義からウラワ(浦曲)、クルワ(郭)など、曲り廻る意からタワム(撓)、シワル(撓)、シワ(皺)などの語を生み、撓み萎る丶意から轉じて、更にヨワシ(弱)となり、これよりまたヒワ(鶸)、イワシ(鰯)などの語が出來てゐる。從つてこの一群の語は盡くワの假名を用ふべきことが推しはかられる。

ワ（輪）
- 圓形
  - ウラワ（浦曲）
  - クルワ（廓）
- 屈曲
  - タワム（撓）
  - シワム（撓）
  - シワ（皺）
- ヨワ（弱）
  - ヒワ（鶸）
  - イワシ（鰯）

右の外、音便、連濁その他の音韻變化によつて假名遣を知ることが出來るものがある例へばツイタチ（朔）はツキタチ（月立）の音便、サイハヒ（幸）はサキハヒ（幸延）、カイ（櫂）はカキ（掻）の音便であるからイの假名、イモウト（妹）はイモヒト（女人）、テウヅ（手水）はテミヅ、ハウキ（箒）はハハキ（葉掃）の音便であるから假名はウである。またアサヂ（淺茅）はアサチ、ハジトミ（半夏）はハシトミの連濁であることを知れば、その假名遣も容易く分かる。しかしこれとてもその根本は語源に關する知識の上に築かれて居ることを忘れてはならぬ。

（二）字音假名遣

字音は支那から來た文字の音であつて、即ち漢字があらはしてゐる支那の國語である。この點に於て字音假名遣は國語假名遣とその根本を異にしてゐるといはねばならぬ。自國の言語は日常使用してゐる間に、自然の發達、若しくは變遷があるけれども、外國から借用したものは、いはゞ死物であつて、言語としての發育は少い譯であるから、我國に於ける漢字は、今なほ比較的古い時代の音を保存してゐる。本國の支那では大抵の古音はみな亡んでゐるのに、我が國では彼土と交通した各時代の音がそれぞれ傳來して保存せられてゐる。漢魏以前の古音を始め、呉音、漢音から唐音、宋音に至るまで、歴世の字音が相交つて保存せられてゐる。古音は姑く措き、呉音、漢音は我が國に傳つた字音中の主要なものであるが、或程度以上は何れが漢音で、何れが呉音であるか、分ちのつかない程紛然として雜居してゐる上に、それがまた我が國語の音韻に支配せられて、遂に發音と假名遣との間に懸隔が出來るやうになつた。こんな有樣であるから、字音假名遣を學理的に知らうとするのは、國語假名遣よりも一層困難であつて、この研究は純然たる一科の專門學となつてゐるのである。從つて字音假名遣を一般の人に强ひるのは、國語假名遣よりもなほ無理なことである。しかし苟もこれを普通教育に採用してゐる以上は、何とか便宜な方法を案出して、その實行を期せねばならぬ。

例へば、國語で山羊をヤギといふのは羊の字音ヤウの古音であるから、この關係を明

にすれば、羊の假名がヨウでなくヤウであることが知れる。また澁をシブといふのは、その字音の國語化したものであるから、字音の假名もシフで、猪口をチョクといふのは鐘の朝鮮字音の轉であるから、鐘の假名はショウである。このやうに字音より國語化したものがあれば、それと對照してその字音の假名遣を知るなども一つの便法である。

また固有名詞例へば地名人名などに假りた漢字の讀方から、その字音の假名を知ることも出來る。

たとへば、王仁を古くからワニと讀んで來てゐるから、王の假名遣はワウであることを知り、ハガといふ地名に芳賀の字を假りてゐるから、芳の字音はハウであることを知るなどで、なほこの類の例を擧げれば

能登	ノト	ノウ	登	ト	ウ	能	ノウ
高陽	カヤ	カウ	陽	ヤ	ウ	高	カウ
高浪見	トラミ	トウ	浪見	ラ	ウ	東漥	トウ
當麻	タギマ	タウ	當	タ	ウ	當	タウ
愛宕	アタゴ	タウ	宕	タ	ウ	宕	タウ
望多	マグタ	マウ	望	マ	ウ	望	マウ
相模	サガミ	サウ	相	サ	ウ	相	サウ
伊香	イカゴ	カウ	香	カ	ウ	香	カウ
余綾	ヨロギ	リョウ	綾	リョ	ウ	綾	リョウ
養父	ヤブ	ヤウ	養	ヤ	ウ	養	ヤウ
入農	ニヒノ	ニフ	入	ニ	フ	入	ニフ
邑代	イヒシロ	イフ	邑	イ	フ	邑	イフ
宗部	ソガベ	ソウ	宗	ソ	ウ	宗	ソウ
融通	ユツキ	ユウツウ	融通	ユウツウ		融通	ユウツウ
明見	ミヤケ	ミヤウ	明	ミヤ	ウ	明	ミヤウ
給理	キヒリ	キフ	給	キ	フ	給	キフ
伊雜	イサハ	サフ	雜	サ	フ	雜	サフ
安良	アラ	ラウ	良	ラ	ウ	良	ラウ
答合	タカホ	タフカフ	答合	タカフ	フ	答合	タフカフ
興福	コンブ	コウ	興	コ	ウ	興	コウ

漢字はその構造の上から次の六種に分つことが出來る。即ち象形、指事、會意、形聲、假借、轉注であつて、これを六書と名づける。この中形聲の文字は全字數の過半を占めてゐるが、これは文字の一半が意義を示し、他の一半が音を示すもので、例へば洋の字はその三水扁が水の類であることを示し、旁の羊がヤウといふ音を表してゐるのである。さうしてこの音を示す部分の共通する文字は、大抵みな同じ音であるから、一字の假名を知れば、同一部類の他の數字の假名をも推測することが出來る。即ち羊がヤウの音であるから、洋佯庠痒恙漾樣養癢など、羊を含んでゐる字はみな同音である。なほ左に前に述べた國語化したる字音から類推の出來る例を二三擧げて見やう。

能登（登）　橙燈蹬鐙磴
　　（豆）　逗頭荳
高陽（高）　犒縞槀膏藁毫豪濠
　　（陽）　揚瘍煬暢楊
王仁（王）　汪旺迋鵀枉往皇凰
芳賀（芳）　彷妨坊防紡舫訪放房髣旁傍膀

本居宣長翁もその字音假字用格の凡例に「大抵は同じ傍などの例にても違はず飴怡貽同じく惟帷唯同しきがごとし」というて居らるゝやうに、大抵はこの方法で推し量ることが出來る。しかし勿論例外も少なくはない。工がコウで、江がカウの類は、特別として別に記憶せねばならぬ。但し或學者がこの理由で本居翁の說を疎漏であると大に非難して居るが、翁の說は原則として誤はない。江はもと工と同音コウで、後カウと變じたのである。風はフウ鳳はホウの音であるが、その源に溯れば、双方とも音は凡に从うてホムであつたのである。

また前に述べた通り、我國に傳はつて居る字音に漢音、吳音、唐音など幾種類もあるが、その中の一つより推して他を知ることも出來る。例へば公卿、大豆、奉行、口入、大工など吳音でウ列音のものが、漢音でオ列長音に發音する場合には、盡く公立、豌豆、奉公、人口、工夫の如くオ列音の假名である。また行火、行燈より行の假名カウ、燈の假名トウを知り、上海、香港、重慶などの地名から、上の假名ジヤウ、港の假名コウ、重の假名チヨウを知るなども一法である。要するに字音假名遣を根本から明かにすることは、學者一代の事業であるから、普通に使ふ字の假名は、こんな手輕な便法による外はない。國語假名遣にせよ、字音假名遣にせよ、とかくこれまでは何等かの方法で、一擧に學び

盡さうとする傾がある。しかし一つは我國の古典の一部分であり、また一つは古今の外國音である以上、さう容易に覺えられる譯がない。どうしても一字一語と修業の功を積まねばならぬ。

朝鮮はもと漢字を本土に傳へた媒介者であり、かつは音韻の變化比較的に甚だしくなかつたから、彼地の今日の字音は、これを本土往古の字音と較べて頗る相近いところがある。德川時代の音韻學者が、韻鏡の研究にいつも朝鮮の字音を參考して居るのは、まことに當然のことである。左に對照する通り、我字音と朝鮮字音とは甚だ近いから、朝鮮音にさへ通じて居れば、字音の假名遣はよほど樂である。

	國語字音	朝鮮語字音
羊	ヤウ	yang
王	ワウ	oang
芳	ハウ	pang
陽	ヤウ	yang
東	トウ	tong
浪	ラウ	rang
當	タウ	tang
望	マウ	mang
相	サウ	sang
養	ヤウ	yang
工	コウ	kong

第五章　文法の研究

國語の組立を研究する上に最も必要なものは文法で、また他の國語との關係を知るにも、これが重な標準になるのである。單語はたとへていへば衣裝のやうなもので、和服なり、洋服なり、絹物、木綿着、何でも、その切地と仕立とは隨意に選擇が出來ると同じく、往古より今日まで交通した國々の單語は、唐、天竺を初めとし、南蠻、紅毛に至るまで、自由に採つてこれを國語の中に加へた。これに反し、文法は恰も人間の骨組に比すべきもので、外部からはこれに何等增減を加へることが出來ない。かく自由に貸借の出來る語ですら、親族的關係のある國語間にその比較を試みれば、幾多の新事實を發見するのであるから、語法の比較研究に於て得るところの多いことはいふまで

もない。例へば英語 manly（男ラシク）などの ly の如き接尾語は、英語のみで考へれば原義が已に亡んで、單に文法上の一形式に過ぎなくなつてゐるが、これを獨逸語 mannlich などゝ比較すると、この ly は lich に當り、lich の語源は lik 即ち英語の like であるといふことが分る。また英語の接頭語 dis はもとより單獨の意義を失うてゐるが、これを羅甸語と比較して見ると、この語はもと羅甸語の dvis（離れる）から出てゐ、この dvis はまた duo（二）といふ語から起つてゐる。それで英語には dis の外に di, de, li などの形となり、例へば discover（發見＝蓋を離す義）の dis, divorce（離緣＝離れ歸る義）の di, deform（變形す＝形を離す義）の de 及び bisect（平分す＝二つに分つ義）の bi の如く用ひられてゐる。勿論語學の研究には學術的と實際的との區別があるから、一般の人には比較研究の必要もないであらうが、苟も國語の組織を科學的に研究しようとならば、材料をこの方面にも求めねばならぬ。

歐洲諸國語は、所謂インドゲルマン大語族を形づくつて居り、その中にはまたアールヤ、スラーブ、チユートン、ローマンの小語族があつて、比較すべき國語の數も多く、從つて材料も豐富であるが、我國語を中心とする語族の調査はいまだその緒にさへもついて居らぬ。我が領土内のアイヌ語、琉球語、朝鮮語すらも、その研究はまことに微

たるもので、學術國としては甚だお恥しい譯である。それ故これより簡單に述べる比較談の如きは、眞に大海の涓滴に過ぎないけれど、常にこの方面に努力する著者の苦心はこれを諒としてもらはねばならぬ。

第一節　體言に關する語法

(一)　動詞形容詞より轉じたる名詞

(一)動詞活用のイ列より名詞に轉じるもの。たとへばウタフ(歌)といふ動詞から名詞をつくるに、語根そのまゝにもなるが、またその活用のイ列即ち連用形から、ウタヒ(謠)といふ名詞も出來るので、このイ列活用から名詞をつくるのは甚だ多い。サムラヒ(侍)といふ語はサモラフ(候)といふ動詞のイ列活用から出たもので、マモラフ(守)といふ動詞と同じく、もとはモル(見)といふ動詞から起り、貴人の左右に侍つて之を守るものゝ義である。タヽミ(疊)はタタム(疊)といふ動詞から出たもので、昔の疊は今日の蓆(ござ)のやうにたゝんだものである。證文の文句にいふ如件のクダンといふ動詞から出て居る。我が國文は上より下へ書き下すから、その各行をクダリと(古事記にも見えてゐる)いひ、クダンの如しとは「前行に書したる如し」といふことである。現今では慣用の語ばかりで、動詞悉くがそ

のイ列活用から名詞に轉じるといふわけではないが、古くは大抵の場合にさうである。今日ひとぎゝ(人聞)、はなみ(花見)、おくゆき(奥行)、あめふり(雨降)などゝ熟語にのみ用ひられてゐるものを、昔は熟語ならずとも「きゝ(聞)のかしこく」「み(見)がほし君」「君がゆき行けながくなりぬ」「霜のふり(降)はも」など自由に用ひられてゐる。朝鮮語でもちやうどこれと同じやうに、例へば tat(閉づ)といふ語を活かせて tat-i とすれば、閉ぢるもの即ち「障子」の義となり、ur(鳴る)から urăi(雷＝鳴るもの)、kor(歩)から kŏri(街＝歩むところ)といふ語が出來てゐる。この外 nŏrp(廣い)といふ形容詞が nŏrpŭi(幅)、khŭ(大い)が khŭi(丈)といふ名詞になるのも、これと同例で、たゞ特に注意すべきことは、國語で動詞のみに限られたこの語形が、朝鮮語では形容詞にも存してゐるといふ事柄である。即ち朝鮮語ではこの點に於て動詞と形容詞との區別がないのである。

(二)形容詞のミといふ活用形から名詞をつくるもの。例へば重ミ・厚ミ・樂ミ・甘ミのやうなもので、普通このミを接尾語と見てゐるけれども、實は古い活用の一つである。このミ活用形も、今日は重んず、安んずなど慣用のものゝ外、餘り多く用ひられてゐないが、古は普通の活用形であつた。このミ活用の名詞形はまた朝鮮語にもある。これも動詞、形容詞の差別なく、例へば kat(同じ―國語如シと同系の語)から katŭm(同じ事)、man(多し―國語普しと同系の語)から man-ŭm(多數)のやうに、また niră(言ふ―國語宣ると同系の語)から nirăm(名稱)、pur(吹く―國語降ると同系の語で國語でも古く風降るといふた)から parăm(風)、kŏr(歩む)から kŏrŭm(歩調)などが出來る。

(三)ク活用形より名詞をつくるもの。例へば言ふより言はく、思ふより思はくなどの類で、體たらくといふ語も體たりの名詞形に他ならぬのである。但しこの形は從來カ行の延言と呼ばれてゐたものであるが、比較研究の結果、新たに活用形の一つと定めたのである。この形も今では願はく、恐らく、聞(きく)ならく、須(すべか)らくなど少數の場合に限られてゐるが、古は「見らく少く戀らくの多き」居らくの奥處(おくか)も知らず」など廣く用ひられたものである。この形は形容詞にもあつて、「筑波根の善(よ)けくを見れば」憂(う)けくに飽きぬ」などがさうである。朝鮮語の例は sar(生く)から sarki(生活)、nor(遊ぶ)から norki(遊戲)、chip(寒し)から chipki(寒氣)などで、これは勿論動詞・形容詞に共通の形である。

以上 i 名詞形、m 名詞形及び k 名詞形の三種は。日鮮共通の語法で、用言に關する論にも參照すべき必要があるから、特に注意を促すために、次に表として擧げて置く。

國語	謠	朝鮮語	遊戲
uta-i		nor-i	

i形	tatam-i	疊
	tom-i	富
	ob-i	帶
m形	to-mi	夙
	yo-mi	嘉
	yasu-mi	休
	omo-mi	重
k形	iha-ku	曰
	mira-ku	見
	yo-ku	善
	huru-ku	古
	kör-i	街
	nörp-üi	幅
	chiu-i	寒氣
	niră-m	名稱
	sară-m	人間
	man-üm	多數
	kat-üm	同一
	sar-ki	生活
	nor-ki	遊戲
	chip-ki	寒氣
	töp-ki	暑氣

(二) 名詞の數及び性

名詞の數及び性の區別は、我國語に於て文法上さほど重大な形式でない。昔から妹(イモ)等、嬬嬬(ヲトメラ)等など複數の形で一人を指し、今日も自分一人をワレワレ、ワタクシドモなどといふのは極普通である。性も同じことで、たゞ語頭または語尾に男女、雌雄の意味の語を加へるだけで、別段これがため文法上他に影響を及ぼすわけでない。

複數を示すに同じ語を重ねることは、國語 na-nar (日々)、ta-tar (月々)、tai-tai (時々)などであるが、これは重複を示すもので、純粋の複數ではない。

トモダチ(友達)、キンタチ(公達)、女どち、犬どちなどのタチ、ドチはツレ(連)、ツラ(列)などゝ同じ語源から出たもので、複數を示す接尾語である。人を數へるにヒトリ(一人)、フタリ(二人)などいふタリも亦恐らく、同じ起源(きげん)のものであらう。

朝鮮語複數の接尾語は tür で、國語 tachi(達)と同系(どうけい)の語であるが、これは生物無生物の分ちなく、人・犬・机・書籍などに均しく加へ用ひるのみならず、獨立に複數を示す場合もある。

國語で名詞の性を示すには、ヲ・メ、イモ・セなどを語頭に加へ、コ・メなどを語尾に添へるのであるが、例へばヲ-ノ-コ(男子)、メ-ノ-コ(女子)、ヲ-ヒ(甥=男人(セ ヒト))、メ-ヒ(姪=女人(メ ヒト))、ムス-コ(息子)、ムス-メ(娘)、セ-ウト(兄=男人(セ ヒト))、イモ-ウト(妹=女人(イモ ヒト))の類、多くはその語源を失うて、獨立の一語となつて居る。最後に擧げた、セウト、イモウトの如きも、一は兄、一は妹の意味に用ひられて居るけれども、これは本來男人(セ ヒト)、女人(イモ ヒト)の義で、昔は姉妹の別なく、男よりは女をイ

モといひ、兄弟の區別なく女より男をセと稱へたもので、イモセは本來男女の義である。序ながら、オトウトは今「弟」の義に用ひられて居るが、これも昔は男女の別なく同胞中の年少者を指したものである。このイモセは男女を區別するのみならず、シ-ふ（牡鹿）メ-カ（妻鹿）、セ-ウガ（生荷）メ-ウガ（養荷）、コノリ（鷂）ス-コノリ（雄鷂）の如く、他の生物にももとは用ひられたものである。

今日の朝鮮語では、人類以外の生物に就いて am, su の兩語で雌雄を區別する。例へば am-so（牡牛）su-tăk（雌鷄）の類で、また sui-api（舅）、sa-hoi（婿）、sam-ahŭi（男子）などの語に徴すれば、もとは人類にも用ひたことが分る。國語シウト（舅）もセ-ヒト（男人）から出た語で、沖繩方言に、父を su といひ母を amu といふのは、古語であると思ふ。

(三) 代名詞及び數詞

代名詞及び數詞は、ヨーロッパ各國語の研究では同一系統語の比較の標準と目せられ、甚だ重要のものとなつて居るが、國語及び朝鮮語の場合には、代名詞だけは符合するが、數詞は全くその發達を異にして居る。

	第一人稱	第二人稱	第三人稱
國語	a ware	na, ni	so, ko, ka
朝鮮語	a, ŏ, ŭi	nă, nŏ	ku, i, ŏ

人代名詞一人稱は國語ア・ウレ朝鮮語 na, ŏ, ŭi である。但し朝鮮語 na も、古くは國語と同じく a であつた。それは古書に新羅人が樂浪といふ今の平壤近傍の地方の人を「阿殘」と稱へたといふことが見えてゐる。これは「我等の殘餘」といふ意味で、新羅人が半島の北部から南進して、その餘黨の殘留したものを指したのであるから、阿は即ち第一人稱である。第二人稱は國語ナ朝鮮語 nă, nŏ、第三人稱はいづれも指示代名詞から轉用する。

國語、朝鮮語とも、人代名詞は漸次敬意を失うて日用に遠ざかるやうになつた。それは直接に自己及び對手を指すことを避けたもので、例へば自分をワレワレといひ、對手をアナタガタ（彼方）と稱するの類、皆それと直接に呼ばず、朧げにそのあたりを指したものである。朝鮮語で自己を cha といふのはその謙稱で、指示代名詞 cha（其＝國語ソ）から出たものである。

國語の數詞は一より十までは完全に出來上つて居るが、それ以上は發育不十分で、ハ

ッカ(廿日)、ハタチ(廿歳)、ミソカ(晦)など、多く歳時を數へるに用ひられ、その他の使用は餘り普通でない。トヲ(十)のヲは「尾」の義で、數の終を示して居る。十の義はトだけでよいのであつて、これにヒトツ(一)フタツ(二)のツが加はれば、つづやはたちのツゞ(十)となるのである。

さて一より十までの中、次のやうに母音の變化で倍數を示して居るものゝあることは、徂徠の「南留別志」にも見え、外國の學者の同じく說くところである。

hi (一) — mi (三)
hu (二) — mu (六)
yo (四) — itu (五)
ya (八) — to (十)

朝鮮の數詞はこれと聊その趣を異にして居る。その研究は未だ十分でないが、tasöt (五)は tu (二) söt (三)の和で、yösöt (六)は söt (三)の倍數を示して居るらしい。果してさうならば、yö-tarp (八)と蒙古語 dürba (四)との間にも連絡のあることが知れる。朝鮮語 ahop (九)蒙古語 gurba (九)、朝鮮語 nikop (七)蒙古語 dorbon (七)なども、また對照の價があるであらう。

かやうに、數詞そのものゝ發達は異樣であるが、數に關する根本の語は國語及び朝鮮語に於て同系のものが多い。例へば國語 kazu (數)、yoro-dsu (萬)、mane (普)、moro (諸)、朝鮮語 kaji (種類)、yörö (多)、man (多)、moro (諸)の類である。

第二節　用言に關する語法

(一)　動詞と形容詞との關係

西洋の語で動詞と形容詞とは、文法上よほど性質が違つて居る。英語 verb (動詞)は羅甸語 uerbum (語)と同じ系統の語である。即ちその遠き源に溯ると √war (談)から出たもので、つまり動詞は談話の主要なる要素である。これに反して adjective (形容詞)の語源は、付添ふ義であるから、動詞と形容詞との間には根本の差別があるのである。これと較べては、國語の動詞形容詞の關係はよほど趣を異にして居る。第一、形容詞は動詞と同じやうに活用する。また動詞は動作を示し、形容詞は形狀を表はすといふ區別より、一にこれを形狀言といふが、しかし一方には有樣といふ語があつて、そのアリは動詞である。富士谷成章が動詞アリを形容詞と一緒に取扱うて居るのはまことに最な考で、助動詞の活用を調べて見ても、その中に動詞的の活用と形容詞的の活用とが交つて居る。これも兩者の關係の近い一證である。

これまで形容詞活用と動詞活用との根本的差別として擧げられて居るところを見

るのに、動詞は五十音圖中のある一行の中に活用し、形容詞は加行佐行に跨つて活くといふのであるが、これはそも〳〵從來の學者が動詞の活用を研究するに、五十音圖をあまりに過信し拘泥した結果で、動詞とても決して活用は一行の中に限られては居らぬ。即ち一段二段のル・レはその一例で、形容詞もそのミを活用に數へたならば、カサマの三行に活用する。要するに活用を五十音圖で制限するのは、これまでの學說の根本に橫はる弊風であるから、これで動詞、形容詞の活用を差別するとは出來ぬ。朝鮮語では、動詞、形容詞の活用が別れて居らぬ。全く一である。この點に於ても朝鮮語の研究は、我國語文法の根源を開發するに極めて重大な關係がある。例へば次の表に示す通り、朝鮮語では動詞、形容詞の活用に何等の相違がないのである。

	動詞	形容詞
語根	nirä (云ふ)	man (多し)
副詞形	nirä-köi	man-khöi
同	nik-i (熟す)	manh-i
名詞形	nirä-ki	man-khi
同	nirä-m	manl-ŭm

國語ではク副詞形は形容詞、i副詞形は動詞のみに限られた形であるが、朝鮮語ではki兩副詞形はかやうに動詞、形容詞に共通する。これによつて考へるに、國語で所謂加行延言の中「止むこともなく戀らくもへば」朝に日に見まく欲りする」戀ひまく思ふ」の戀らく、見まく、戀ひまくなどは、形容詞のク副詞形と同し活用と見ねばならぬ。次にmk兩名詞形のことは、既に前章に述べたが、朝鮮語と同じく國語に於てもこの形が形容詞のみならず動詞にもともと〳〵備はつて居つたと思はれる理由がある。このことを說明する順序として、第一に述べることは、名詞が動詞に轉じることである。例へば、枕・羅・蘰・肩・股・綱から枕く、羅く、蘰く、肩ぐ、股ぐ、綱ぐ、爪・力・腹・層から爪む、力む、腹む、層む、數・古・里・煤から數ふ、古ぶ、里ぶ、煤ぶなどが出來る。これは形容詞の名詞形も同じことで、例へばヤスシ(易)、ウシ(憂)、ヲシ(惜)、からヤスム(休)、ウム(倦)、ヲシム(惜)などが出來る。それ故アサム(嘲)、アサク(嘲)はアサシ(淺)から、セム(攻)、セク(塞)はセシ(狹)から、イソグ(急)、イサム(勇)はイソシ(忙)から轉じた動詞と見ねばならぬ。而してこれを朝鮮語の例に照らすに、次の如く動詞の名詞形が轉じて更に別箇の動詞となるものがある。

nirä-ta	云ふ	nirk-ta	讀む
saro-ta	燒く	sarm-ta	烹る

それ故、國語の動詞中左記のやうに同一語根のmkに活用するものは、もとmk名詞形のあつたことを證明するものであらうと思ふ。

odsu	怖	odoro-ku	驚
naku	泣	nage-ku	歎
semu	攻	seme-gu	閲
nayu	萎	naya-mu	病
kaku	柵	kaku-mu	圍
taru	垂	taru-mu	弛

さて、ハマ兩行の音は相通じて kakomu (圍) = kakohu (圍)、ukamu (浮) = ukabu (浮) のやうに用ひられるから、次の如く同一語根のハ行に活くものは、m活用の轉じたものと考へられる。

otoru	劣	otoro-hu	衰
utsu	打	uta-hu	歌
naru	馴	nara-hu	習
arasu	荒	araso-hu	爭
sumu	住	suma-hu	住
tataku	毆	tataka-hu	戰
negu	祈	nega-hu	願

朝鮮語でも、ハ行(p)音に活用して動詞、形容詞の相轉換する例がある。

sui	休む	sui-p	易し
us	笑ふ	usŭ-p	をかしい
nŏrŭ	廣い	nŏr-p	廣い
si	爲る	si-p	爲たい
yat	淺い	yatchŭ-p	嘲る

かやうに朝鮮語と比較して見ると、國語の動詞も曾てmkに活用したことが分る。なほ一言にして盡せば、アサシ(淺)からアサム(嘲)アサク(嘲)、セシ(狹)からセム(攻)セク(塞)などの動詞の出來るのは、形容詞にmk活用のあるからであるが、動詞にシヅム(沈)シヅク(沈)、ノゾム(臨)ノゾク(覗)など一對の活用のあるのは、もと形容詞と同じやうにmkに活いたがためであると考へるのである。

形容詞

動詞

se-ku	塞	ne-gu	祈	
se-mu	攻	no-mu	禱	
iso-gu	急	ho-gu	壽	
isa-mu	勇	ho-mu	譽	
asa-ku	嘲	we-gu	嘘	
asa-mu	嘲	we-mu	笑	
nuru-gu	緩	sino-gu	凌	
nuru-mu	緩	sino-bu	忍	
sira-gu	白	ayu-gu	歩	
sira-mu	白	ayu-mu	歩	

(二) 動詞活用の古形

國語の動詞活用は正格、變格の數種類に別れて居るが、その中の過半數は四段活用であつて、またこれが最古の活用であるといふことだけは、既にこれまでの學者間の定説である。然しながらこの活用の研究は、德川時代の國學者が非常な努力を以てその基礎を築いたばかりで、明治年間に至ては別段著しい進歩もなく、今もまだ未成品

たるを免れぬ。それは前にもいうた通り、この研究の裏面に五十音圖といふものがあつて、何事もこれに當篏めてゆかねばならぬといふ非常な不自由な境遇に居るのである。アストンの朝鮮語比較研究、チェーンバレンの琉球語調査の如きは、確(たしか)にその材料に於て一段の進歩を示して居るけれども、しかもなほ五十音圖といふ窮屈な束(そく)縛(ばく)から免れ得たとは思はれない。それ故、吾人は先づ第一にこの音圖を離れた自由な研究の必要を絶叫せねばならぬ。

既に述べた通り、朝鮮語の例に照すと、動詞は盡く同一活用であるのみならず、形容詞と動詞との活用にも更に異なるところがないのであるから、國語の動詞活用もその根源に於て一に歸し、しかもこの古活用は動詞活用及び形容詞活用の特徴を兼ねたものであらうと思ふ。吾人の見るところによれば、動詞に數種の活用の出來たのは、一に動詞アリ(有)の所爲である。國語 ari (有)は朝鮮語 ir または or で、ir 轉じて it となり、更に i となる。この動詞アリ(有)は次の如く日鮮兩語に於て自動詞、他動詞を別ち、所相を作り、朝鮮語では更に使役相(しえきさう)をも作るのである。

國語

他動詞　自動詞

sasu	刺す	sasa-ru	刺さる
sutsu	捨つ	suta-ru	廢る
kabusu	被す	kabusa-ru	被さる
hasu	馳す	hasi-ru	走る
	能相		所相
miru	見る	mira-ru	見らる
osu	押す	osa-ru	押さる
yomu	讀む	yoma-ru	讀まる
kiku	聞く	kika-ru	聞かる
朝鮮語			
	能相		所相
pur	吹く	pur-i	吹かる
mur	嚙む	mur-i	嚙まる
ppop	拔く	ppop-i	拔かる
	自動		他動

na	出る	na-i	出す
mo	集まる	mo-i	集める
chuk	死ぬ	chuk-i	殺す
sar	生く	sarr-i	活かす
			使役相
ur	泣く	urr-i	泣かす
cha	寐る	cha-i	寐かす
mök	食ふ	mök-i	食はす
nip	着る	nip-i	着さす

かやうに、アリの一語が加はつて、種々の變化を來すのである。古人が自他といふ名目の中に上記の各種類を含めて論じて居るのは、我國語の構造に適した名說であつて、後人が徒らにこれを細別するのは、却て皮相の見であらうと思ふ。

さて、この動詞アリ(有)がその母音を變じてウ(得)といふ動詞になる。ウ(得)は下二段活用で、アリ(有)と活用の違ふのは、音韻變化をうけてラ行音がなくなつたゝめである。それ故、所相を作ればエラル (er-aru) となり、ク活用に活かすとウラク (ura-ku) となる。

即ちウ(得)の語根はuで若くはuで、アリ(有)の語根はとたゞ母音の異るのみである。これとちやうど同じ順序で、サ行變格ス(爲)と動詞アリ(有)との關係を說明することが出來る。即ち所相セラル(sera-ru)、ク活用スラク(sura-ku)を見れば、その語根がserまたはsuraであることが分る。然るにこのサ行變格活用は下二段活用の別格で、敬語助動詞の場合には、古く「此戸開かせ」「豐御酒奉らせ」の如く四段に活いて居る。この四段活用のス(爲)にアリ(有)が複合し、更に音韻變化を受けた結果下二段活用となり、それがまたサ行變格活用となつたものであらう。それ故、次に擧げるやうなサ行四段活用の諸動詞はス(爲)の古活用と考へられる。

暮	kuru	kura-su	kura-ku
探	saguru	saga-su	saga-ku
生	naru	na-su	nara-su
悟	satoru	sato-su	sata-su
懲	koru	kora-su	kora-ku
冷	hiyu	hiya-su	hiya-ku
降	oru	oro-su	ora-ku

沸	waku	waka-su	waka-ku
晴	haru	hara-su	hara-ku
垂	taru	tara-su	tara-ku

以上述べたやうに、アリ(有)から下二段活用ウ(得)及び佐行變格活用ス(爲)といふ動詞が別れて出た。一段及ひ二段の諸活用も大體これと同じ順序で出來たものであるから、一々いはぬが、その所相及びク活用を作つて見ると、やはり語根にラ行音が含まれて居て、アリ(有)の複合したものであることがわかる。

		所相	ク活用
上二段	oku (起)	okira-ru	okura-ku
上一段	miru (見)	mira-ru	mira-ku
加變	ku (來)	kora-ru	kura-ku

要するに、四段活用ナ行變格活用を除く外は、皆直接間接にアリ(有)の關係せぬものとてはない。さて、そのアリ(有)も四段活用の別格と見るべきものであるから、我國語の動詞活用の根元は、古來の說の通りやはり四段活用に帰するのである。

四段活用といふ名稱は、動詞の語尾がアイウエの四列に活用するからで、前に述べた

通り、五十音圖を離れた自由な見地からいへば、この他にク活用なども加へねばならぬ。要するに、國語最古の活用は四段活用と形容詞活用の一部とを併せたやうなものであらうと思ふ。なほ上記の次第を表に示めし、活用變遷の徑路を明かにして置く。

四段	良變
有	有
ar-*a*	yuk-*a*
ar-*i*	yuk-*u*
ar-*i*	yuk-*u*
ar-*u*	yuk-*u*
ar-*e*	yuk-*e*

良行變格活用アリ(有)は、その終止形を除く外、總て四段活用と同じである。しかも、その終止形アリも助動詞ベシ・ラムなどの續くときは、變じてアルとなるから、これを四段活用の變體と認めて、四段の別格と稱へるのである。

良變	下二段
有	得
ara	e(r)
ari	e(r)
ari	u(r)
aru	u*ru*
are	u*re*

上二段	上一段	下一段	佐變
生	見	蹴	爲
iki(r)	mi(r)	ke(r)	se(r)
iki(r)	mi(r)	ke(r)	si(r)
iku(r)	mi*ru*	ke*ru*	su(r)
iku*ru*	mi*ru*	ke*ru*	su*ru*
iku*re*	mi*re*	ke*re*	su*re*

以上は盡く良行變格活用と關係のある活用で、その一部分にr音を失うたものである。今これを括弧内に入れて補うて見た。

四段	良變	奈變
行	有	往
yuk-*a*	ara	in-*a*
yuk-*i*	ari	in-*i*
yuk-*u*	ari	in-*u*
yuk-u	a*ru*	inu-*ru*
yuk-e	a*re*	inu-*re*

奈行變格活用は四段と良變との混合したやうな活用である。これは四段に

良變が作用して一段二段等の活用に至る半途の形であらうと思ふ。

(三) 動詞の分類

動詞は樣々の方面から分類することができる。かの詞八衢はこの種の研究の鼻祖であつて、四段・一段・中二段・下二段・變格等の活用に分け、その語尾によつてこれを五十音順に集めたものである。しかし、吾人は動詞の諸活用が一元に皈し、形容詞活用もまたその一部分に加はるべきことを主張するものであるから、今こゝに活用の如何を問はず、たゞ語根のみを類別して次のやうな結果を得た。

(い) 語根のr音で終るもの

この類の動詞はその數が一番多く、動詞總數の約三分の二を占めてゐる。この中の多數はアリ(有)と關係があるもので、

ゐる	(繪)	る	(彫)
やど	(宿)	やどる	(宿)
すぢ	(筋)	すぢる	(捩)
うね	(畦)	うねる	(曲)
はや	(早)	はやる	(早)

ほそ	(細)	ほそる	(細)
ねむ	(眠)	ねむる	(眠)
つよ	(強)	つよる	(強)

右に擧げたのは、名詞または形容詞語根とアリ(有)との複合したものである。

すつ	(捨)	すたる	(廢)
しむ	(締)	しまる	(締)
ひろむ	(廣)	ひろまる	(廣)
うむ	(生)	うまる	(生)
そむ	(染)	そまる	(染)
あつむ	(集)	あつまる	(集)
あつ	(當)	あたる	(當)
くはふ	(加)	くはは	(加)
かたむ	(固)	かたまる	(固)

以上の類はアリ(有)の複合して他動詞を自動詞に變じた例である。

のこす	(殘)	のこる	(殘)

ひたす（浸）
さとす（諭）
こやす（臥）
くだす（下）
しめす（濕）

これ等は一方がス（爲）の複合で他動詞となるに對し、アリが結び付いて自動詞となる。例である。

（ろ）語根のｓ音で終るもの

この中にも、また名詞及び形容詞根にス（爲）の複合したものがある。

こな（粉）　こなす（消化）
やど（宿）　やどす（宿）
ふる（舊）　ふるす（舊）
なほ（直）　なほす（直）
さと（敏）　さとす（諭）

その他は多くス（爲）の複合で他動詞を作るものである。

たゆ（絶）　たやす（絶）
こる（凝）　こらす（凝）
のぶ（延）　のばす（延）
おつ（落）　おとす（落）
てる（照）　てらす（照）
ぬる（濡）　ぬらす（濡）
いづ（出）　いだす（出）
おふ（生）　おほす（生）
あむ（浴）　あむす（浴）
きゆ（消）　きやす（消）
はげむ（勵）　はげます（勵）
おづ（怖）　おどす（威）

（は）語根のｋ音で終るもの

これにも次のやうに、名詞又は形容詞根の活用するものがある。

つな（綱）　つなぐ（綱）

すゝ（煤）
かづら（蘿）
あら（荒）
いそ（忙）
たひら（平）

また左の如き動詞は、ク に活用するとき、幾分その意義を變じるのである。

せむ（攻）　せめぐ（閹）
あさむ（嘲）　あざむく（欺）
つらぬ（連）　つらぬく（貫）
おづ（怖）　おどろく（驚）
なく（泣）　なげく（歎）
うする（薄）　うすらぐ（薄）

(に)語尾の m 音で終るもの

この類にも、名詞或は形容詞根の活用するものがある。

よど（淀）　よどむ（淀）

そば（側）　そばむ（側）
あだ（仇）　あだむ（仇）
しわ（皺）　しわむ（皺）
くぼ（窪）　くぼむ（凹）
はら（腹）　はらむ（孕）
あを（青）　あをむ（青）
たのし（樂）　たのしむ（樂）
きよ（清）　きよむ（清）
かた（固）　かたむ（固）
うれし（嬉）　うれしむ（嬉）

動詞が更に m 音に活用する例もあるにはあるが、あまり普通でない。

とづ（閉）　とぢむ（閉）
たゆ（絶）　たゆむ（弛）

しかし、バ マ 兩行音相通の關係で、ハ 行音（古音 p）に活用する例は夥（おびただ）しくある。

たる（足）　たらふ（足）

うつる（移）
すむ（住）
そこぬ（損）
つくる（作）
かく（圍）
むく（向）
はづ（恥）
よぶ（呼）
うく（浮）
かたる（語）
やる（遣）
とる（取）

この類にも亦名詞或は形容詞根の活用するものがある。

おきな（翁）
おとな（大人）

うつろふ（移）
すまふ（住）
そこなふ（損）
つくらふ（繕）
かこふ（圍）
むかふ（向）
はぢらふ（恥）
よばふ（呼）
うかぶ（浮）
かたらふ（語）
やらふ（遣）
とらふ（捕）

おきなぶ（翁）
おとなぶ（大人）

かず（數）
わろ（惡）
うと（疎）
をさな（幼）
した（親）

かぞふ（數）
わろぶ（惡）
うとぶ（疎）
をさなぶ（幼）
したふ（慕）

以上は動詞の語根を標準とした分類法の概要であるが、これは活用の根本研究に關する新しい解釋に基いたものであるから、前節と對照して十分に會得せらるゝやうに希望する。

（四）文語と口語

文語では四段活用が最も多數で、殆んど動詞總數の過半數を占めて居る。これに次いで下二段活用が多い。上二段活用になると、その數が非常に少なく、上一段活用は僅に十數語に過ぎない。下一段活用に至つては、たゞ「蹴る」の一語ばかりである。それさへ古くは蹴（クエハラ、カスマリコユ）散・蹴鞠などの如く、クウ若しくはコユと、和行・也行の下二段に活いたものであるから、一段活用の勢力は實に微々たるものである。しかし、これは中古の語法についての談で、もつと昔に溯ると、四段活用の勢力が一層盛んであつた。滯（す）

ふ・忘る・馳す・寢ぬ・生く・隔つ・止む・恐るなどの二段活用言はいづれも皆四段に活いて、「帶べる玉」妹は忘らじ「馳させて」寢さむ」いつまで生かん命ぞ「隔てる國」止みかね」人の耳に恐り」などゝ用ひられた。「恐らく」といふ形は後世まで行はれてゐるが、これも恐ラリルと四段に活く古い活用から、クに轉じたものである。この四段活用全盛の時代の次に、二段活用が漸く頭角を露はして來て、一時は同じ語を四段と下二段との兩樣に用ひた時代もあつた。然るに近代になつてまたこの形勢が一變し、一段活用が俄に活氣を帶びて來て、今日の口語では四段活用と肩を比べるやうになつた。

口語の動詞で一番多いのはやはり四段活用である。これは文語と同じく、行カヌーキ・クーケのやうに四段に活くもので、未來の助動詞が接續する場合だけは、ア列音がオ列音に變じる。文語の奈行變格往ぬ死ぬ、良行變格有り及び上二段活用恨む、下一段活用蹴るは、いづれも口語では四段活用となる(念のため片假名で文語の活用を添へて置く)。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
急	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
行	か	き	く	く	け	け

押	さ	し	す	す	せ						
勝	た	ち	つ	つ	て						
往	な	に	ぬ	ぬ(ヌル)	ね(ヌン)						
謠	は	ひ	ふ	ふ	へ						
忍	ば	び	ぶ	ぶ	べ						
讀	ま	み	む	む	め						
語	ら	り	る	る	れ						
蹴	ら(ケ)	り(ケ)	る(ケル)	る(ケル)	れ(ケレ)						
有	ら	り	る(リ)	る	れ						
恨	ま(ミ)	み(ミ)	む(ム)	む(ムル)	め(ムレ)						

以上の中良行變格「有り」(ア)は、四段の別格ともいはれるものであるから、その四段に轉じることは別に論はない。奈行變格も動詞活用の古形の條に述べた通り、もと四段と緣の深い活用であるからであらう。「恨む」は心(ウラム)見の義で、もと一段活用の「見る」(ミ)の複合したものであるから、文語で上二段に活かせることが既に變則なのである。

文語では僅かに「蹴る」の一語であるに反して、口語で四段に次いで多いのが下一段活用で、文語の下二段は盡くこの活用となる。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
得	え	え	える	える	えれ	え
受	け	け	ける	ける	けれ	け
捧	げ	げ	げる	げる	げれ	げ
任	せ	せ	せる	せる	せれ	せ
混ゼ	せ	せ	せる	せる	せれ	せ
立	て	て	てる	てる	てれ	て
秀	で	で	でる	でる	でれ	で
尋	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ね
唱	へ	へ	へる	へる	へれ	へ
調	べ	べ	べる	べる	べれ	べ
譽	め	め	める	める	めれ	め

	榮	晴
將然形	え	れ
連用形	え	れ
終止形	える	れる
連體形	える	れる、
已然形	えれ	れれ
命令形	え	れ

これと同じやうに、文語の上二段活用は口語で上一段活用となる。

	起	過	落	恥	煮	延	干	見	下
將然形	き	ぎ	ち	ぢ	に	び	ひ	み	り
連用形	き	ぎ	ち	ぢ	に	び	ひ	み	り
終止形	きる	ぎる	ちる	ぢる	にる	びる	ひる	みる	りる
連體形	きる	ぎる	ちる	ぢる	にる	びる	ひる	みる	りる、
已然形	きれ	ぎれ	ちれ	ぢれ	にれ	びれ	ひれ	みれ	りれ
命令形	き	ぎ	ち	ぢ	に	び	ひ	み	り

加行變格・佐行變格は、また次のやうに變る。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
來	こ	さ	く	くる	くれ	こ
爲	せ	し	す	する	すれ	せ

佐行變格動詞爲（ス）は存ず（ゾン）・命ず・欲す（ホッ）・論ず（ロン）・毀ず（グ）・解す・封ず（フウ）・無す（ナミ）・與す（クミ）など、漢語や名詞と複合する場合が甚だ多いが、口語では混ジル、信ジル（シル）などのやうに、上一般に活くものもある。

文語では正格五種、變格四種合せて九種の活用に分れて居るものが、口語ではかやうに四段・上一段・下一段・加行變格・佐行變格の五種に減じてゐる。その中、四段活用の最も多いことは文語も同じであるが、文語で四段活用に次いで多數な下二段活用が全く無くなり、その代りに文語で僅に一語のみの下一段活用の數が、四段活用の次位を占めて居る。即ち古今を通じてその勢力に大なる變化のないのは四段活用ばかりで、その他は時によつて各その消長があつた。

（五）形容詞活用

形容詞活用の成立したのは、動詞に比べると比較的新らしい。ケレといふ活用も奈

良朝の頃にはまだなかつたから、「衣こそ二重もなき」など、コソの係はいづれも連體形で結んでゐる。その他善（ヨ）ケク・安ケクなどもケキ・ケシの活きはない。また蓋シ・若シは蓋シク・若シクとなるから、形容詞活用らしくもあるが、蓋シキ・若シキといふ形はない。その他、大ヤカ・和ヤカ・朗ラカなども、形容詞活用の不完全なものらしい。かやうなわけで、動詞に關する研究は比較的進んで居るのに、形容詞の志幾（シキ）活用・志々（シシ）幾（キ）活用の二種についても、果して根本的の差別があるか、或は著（シル）ク・著（イチジル）シク」頑（カタクナ）ク・頑（カタクナ）シク」などのやうに、兩樣に活く例もあるから、もと〳〵一つの活であつたか、まだ定論がない。權田直助の形狀言八衢（ちまた）は、形容詞活用は一種であると主張したもので、その要點は略（ほ）ば次のやうである。

（一）淺（アサ）さ・淺み・淺げ」嬉（ウレシ）み・嬉さ・嬉げ」などのやうに、げ、さ、みは本言を受けるものであるから、語根は、あさ、うれし、である。

（二）終止言は同音の重なるのを忌んで、うれし、とのみいふが、口語ではあさい、うれしいといふ故、あさし、に對してうれしし、といふ形のあることが分る。結局し音の重なるを避けたいけで、形狀言二種の活用は全く同一である。

（三）凡て活用言の活用はいづれも一音であるのに、形狀言のみしく、しき、と二音たる

べき筈がない。

(四)淺瀬(アサセ)・深淵(フカブチ)・細女(クワシメ)・空煙(ムナシケブリ)などの如く、名詞と複合するには、いづれも本言よりすべきものであるから、くはし、むなしの語根たることは明かである。

しかし、此問題は今なほ解決されて居らぬ。

予は志志幾活用のシを語根に屬するものとは思はぬ。それは戀(コヒ)し・美(クハ)し(戀(コ)ふ)・珍(メヅラ)し(愛(メ)づ)など、動詞から轉じたもの、女々しなど形容詞の語根から出たもの、また惜工(アタラタクミ)・久々(ヒサビサ)などの例について考へるに、このシが語根以外のものであるとは思はれぬ。

なほ我國語と同系の朝鮮語の形容詞を參考すると、一層このことが明瞭になる。次のやうな日鮮同語源の形容詞を比較するに、

國語		朝鮮語	
kuha-si-ku	(美)	kop-köi	(美)
mane-ku	(普)	man-khöi	(多)
goto-ku	(如)	kot-köi	(同)
suko-si-ku	(少)	chök-köi	(少)

美(クハ)く・少(スコ)くなどのシが語根でないことが分る。

朝鮮語では、このやうに形容詞活用に二種の別もなく、シといふ活用形もない。然るに我南島の方言も亦これと一致して居る。これは我形容詞の研究上有用なる材料で、この問題は必ずこれ等の方言調査によつて解決せられる時期が來るに相違ない。

沖繩方言	終止形	副詞形	名詞形
八重山方言	(副) tûsa-n	tû-ku	tû-sa
宮古方言	(同) tûsa-an	tû-ku	tû-sa
	(同) agâtak-am	agâta-fu	agâta-sa

かやうに沖繩八重山兩方言では、名詞形 tûsa と動詞 ar(有(アリ))と複合し、宮古方言では副詞形と動詞 am(有(アリ))と複合して終止形を構成して居る。

沖繩方言		國語	
mâ-san	(味)	uma-si	(味)
wukashan	(可笑)	woka-si	(可笑)
sidasan	(冷)	suzu-si	(冷)

この例で見れば、凡て活用に二種の別がなく、皆一樣である。即ち umasa（味）katasa（堅）の如く、wukasa（可笑）sidasa（冷）が出來て居る。我國語もこれと同じく初は志幾活用一種であつたらしい。それが何かの理由で、志志幾活用が出來、類推等の作用で段々殖えたものと思はれる。その理由といふべきものを想像するに、恐らく他の品詞を形容詞に轉ずる場合に起つたものであらう。執念を執念く、黄色を黄色くとする類も、偶にはあるが、大人・花々・雄々・神々の如きを形容詞とするには、何かこれに活用の基礎たるものを加へねばならぬ。これは名詞を動詞にするときも同じことで、古す・枕く・雲る・腹むなどのすく、る、むがそれであるが、この場合には志幾活用の終止形シが、その撰に當つたのである。然らばその志幾活用のシは何であるか。

予は形容詞活用のシは佐行變格爲と關係があると思ふ。全體爲は佐行變格活用であるが、これと同系の敬相助動詞すは古く四段に活いて「舟出せすかも」御手にとらし給ひなどの例もあり、驚かす動かすなども、使役相の意義から出て、活用は四段である。その上打消の助動詞まじは形容詞の樣に活くが、このまじを推量の助動詞ましと比較して考へるにこのまは見、じは爲といふ動詞で、打消の意は濁音の中に存するこ

とが分る。かやうに爲といふ動詞が、一方に於て古く四段に活き、また一方に於て形容詞活用をすることから、推して考へると、すはもとさ、し、す、せ、しく、しき、しみなどゝ活いたものと思はれる。之は即ち動詞・形容詞の活用を兼ね合せた古い活用で、後これが二つに別かれ、し、しく、しきは形容詞專門となりその他は色々變化をうけた末、遂に佐行變格となつたのであらう。

語根	副詞形	終止形	連體形	已然形
志幾活用	く	し	き	けれ
志志幾活用（善）よ（惡）あ	く	し	き	けれ
	く	し	しき	しけれ

以上の外樂しみ・おもしろみ「強げ・心ありげ」善さ・惡しさ」などのやうにみ、げ、さが形容詞に添ふと名詞になる。その中げとみとは動詞のく、み名詞形と同じもので、共に活用の古形である。

げはく名詞形例へば「戀しくの多かる我」筑波根の善けくを見れば」などの變體で、み名詞形は安み・重み・樂しみ・嘉みわが居る山の風早みなり」などの類であるが、この兩種の名詞形はどの形容詞にもあるわけでなく、その區域が限られて居るのみならず、又一

方に延らか・大らか・大やか・大か・和やか・僅か・朗やか・朗かなど一種の變體と見るべきものもある。

このく、み兩名詞形が轉じて動詞或は形容詞となることは、一つの面白い事實で、黄色・女雄・美肩・裝束・彩色・力から黄色し・女々し・雄々し・美々し・肩ぐ・裝束く・彩色く・力むといふ動詞・形容詞の出來るのと同じやうに、多より大きし、狹より狹まし、などが出來る。この二種の中、くの方は具體的、みの方は抽象的の意味を具へて、その間に多少の區別がある。廣しより別れた廣む・廣ぐの二動詞を比較して見れば、略その消息が分かる。

さ名詞形は會ふさ・來るさ・行くさ・歸るさなどゝ用ひる。この形は朝鮮語にはないが、沖繩方言の形容詞活用は、實にこの名詞形の上に組立てられて居るのみならず、動詞にも亦類似の形がある。

沖繩方言		國語
mî-sa	(新)	nibi
atara-sa	(惜)	atara-si-sa
usuma-sa	(凄)	oyoma-si-sa

而して獨りzhun(爲)といふ動詞にのみは、この名詞形がない。故にこのs名詞形は動詞「爲」と同根らしく思はれる。要するに沖繩方言に保存されて居るこの古名詞形は、形容詞活用の研究上貴重なる材料に相違ない。

沖繩方言		宮古方言	八重山方言
tuyu-si	(取)	turu-si	turu-si
chû-si	(來)	ksu-si	ksû-si
mû-si	(見)	mi-si	mi-si
a-si	(有)	ari-su	a-si

(六) 形容詞の分類

清し・寒し・樂し・正しなど生來の形容詞は暫く別として、あらまし形容詞の種類を分類して見ると、

(い) 名詞に冠して用ふるもの

大空　珍人　吉詞　狹物
生善肉　荒妙　痛手　青柳

近隣（チカトナリ）　長夜（ナガヨ）　淺瀬（アサヤ）　深緑（フカミドリ）
味酒（ウマサケ）　熟稻（ウマシネ）　空言（ムナゴト）　惜工（アタラタクミ）
荒玉（アラタマ）　大路（オホヂ）　宜女（ヨロシメ）　徒車（ムナグルマ）
細女（クハシメ）　愛妹（ウツクシイモ）　新世（アラタヨ）

この類は、多く形容詞の語根が直接名詞と複合するものであるが、また「見が欲し國」友なし千鳥」長々し夜」宜（ヨロ）し女」賢（サカ）し女」愛（ウツク）し妹（イモ）」などは、その終止形が同樣に用ゐられて居る。

（ろ）名詞から轉じたもの

神　かう〳〵し　宗　むね〳〵し
花　はな〳〵し　黄色　きいろし
物　もの〳〵し　大人（オトナ）　おとなし
白　しら〳〵し　雄　をゝし
事　こと〳〵し　女　めゝし

この類には、はな〳〵し、をゝしなどのやうに疊語が多く、きいろし、おとなしのやうな場合は極少ない。

（は）漢語から轉じたもの

骨　こち〳〵し　餘處　よそ〳〵し
勞　らう〳〵し　執念　しふねし
美　びゞし　仰　ぎよやう〳〵し
熱　ねつし　四角　しかくし

この類にも亦疊語が多い。

（に）語根の疊語よりなるもの

賑　にぎ〳〵し　呶　くど〳〵し
初　うひ〳〵し　捗　はか〳〵し
恭　うや〳〵し

この類のうひ、にぎ、うやはかなどは、或は名詞或は形容詞・動詞等の語根から轉じたものと思はれる。

（ほ）動詞から轉じたもの

恨　うらめし　羨　うらやまし
急　いそがし　愼　つゝまし
好　このまし　愛　めづらし

頼	たのもし
恐	おそろし
戀	こひし
騒	さわがし
晴	はれ〴〵し

この類にはあまり疊語がない。

(へ) 形容詞の活用形から轉じたもの

多(オホシ)	おほ-きし
淺(アサシ)	あさ-まし
狹(セシ)	せ-まし

多(オホ)しといふ形容詞が多く、多きと活き、これらの活用形から大(オホキ)しといふ形容詞が分れたものである。國語では古く數の多いことも形の大いことも、ともにオホの一語で表はしてゐたもので、後に多し・大(オホキ)しの兩語となつたのである。嫉(ネタ)し・嫉(ネタ)まし」鈍(オゾ)し・鈍(オゾ)まし」などは、いづれも三形名詞が更に形容詞となつたもので、意義は別段變つて居らぬ。淺(アサ)ましも「淺(アサ)し」の名詞形「淺み」が再び形容詞となつたものであるが、これ

顔	ねがはし
病	やまし
慕	したはし
馴	なれ〴〵し
忌	いま〳〵し

(へ) 形容詞の活用形から轉じたもの

嫉(ネタシ)	ねた-まし
鈍(オゾシ)	おぞ-まし

は意味も變つて居る。

(と) 形容詞語根の疊語よりなるもの

重	おも〳〵し
輕	かろ〴〵し
長	なが〴〵し
近	ちか〴〵し
遠	とほ〴〵し
白	しら〴〵し
苦	にが〴〵し
弱	よわ〳〵し

(七) 文語と口語

文語では形容詞の活用が二種に分れてゐるが、口語ではそれが一つになつてゐる。

	語根	副詞形	終止形	連體形	已然形
白	しろ	しろく	しろい	しろき	しろけれ
寒	さむ	さむく	さむい	さむき	さむけれ
早	はや	はやく	はやい	はやき	はやけれ
強	つよ	つよく	つよい	つよき	つよけれ

親	したし	したしい	したしい	したしけれ
美	うつくし	うつくしい	うつくしい	うつくしけれ
忙	いそがし	いそがしい	いそがしい	いそがしけれ
樂	たのし	たのしい	たのしい	たのしけれ

かやうに二種の活用が一つになり、また終止形と連體形との區別もなくなる。文語で「白し」といふ終止形「白き」といふ連體形が、口語でいづれも「白い」となり、副詞形も「白く」といふ外に「白う」ともいふなど、全體に於て餘程音韻の變化が行はれてゐる。

第三節　助辭に關する語法

本節には助辭の中、動詞形容詞と同じやうに活用する助動詞と、豆爾遠波（テニヲハ）とのことを述べて、その他は省略する。

(甲)　助動詞の活用

助動詞にもと獨立の意義を具へた用言であつたのを、他の語に、結びつけて用ひられるうち、いつしかその意義を失うて附屬的のものとなつたのである。ちやうど有（アリ）・得（ウ）・爲（ス）などが他の動詞根に結び付いて、諸種の活用をする場合と同じで、また特に面白いことには、この同じ有（アリ）・爲（ス）・見（ミル）などの少數動詞が縱橫無盡（じうわうむじん）に活動して、助動詞の大部分を作つて居る。活用言の主要な機關がこれ等少數動詞の手で支配せられてゐることは、實に言語の巧妙な構造といはねばならぬ。

助動詞を意味の上から所相・勢相・使役相・指定・打消・過去・未來・推量・詠歎・比況の十種に分け、又その活用の上から動詞的・形容詞的・變體の三種に分ける。

第一項　所相

所相は働掛（はたらきかけ）に對する受身（うけみ）であつて、他から起る動作を此方に受ける意のものである。例へば「親子を育つ」といふ場合の育つは、働の此方から出て彼方に及ぶもので、働掛の動詞であるが、これを主客倒置して「子親に育てらる」といへば、彼方から起る働を此方に受けるので、この場合の育てらるは卽ち所相である。それ故能相の場合の目的は所相の場合に主となり、能相の場合の主は所相の場合に動作の標準（へうじゆん）となるので、上例の「親に」は卽ち所相動詞育てらるの標準である。

所相を示す助動詞にルとラルとの二種類がある。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
所相	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ

られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ

このルとラルとはこれまで相竝んで兩箇の助動詞と見做されて居つたが、其實ラルのラは脫け落ちた動詞根の復活したもので、結極所相助動詞はルの一種に歸すべきものである。（七九―八四頁參照）

國語及び朝鮮語では所相の使途が頗る偏してゐて、その發達の上にも特色がある。卽ち國語では所相轉じて勢相となり、朝鮮語では勢相及び使役相となり、又兩國語とも所相と同じ構造を自他の別に用ふることが多い。（七七―七九頁參照）

かやうに同一の構造で異る意義を表して居ることは、一方から見ればまだ所相勢相等の區別が十分に分立して居らぬことを證明するものである。それ故同じ所相の中にも幾つも種類があつて、一概に論ずることは出來ぬ。

親子を育つ　(1)子親に育てらる

育つは此方から起す動作で、育てらるは彼方から起した動作を此方で受けるのであるこれは所相の本體であるが、實際上用ひられる場合に制限がある。

人花を見る　花人に見らる

我文を讀む　文我に讀まる

理論上少しの故障もないこの所相は、實際用ひられて居らぬ。有對他動詞の場合にも、

人我に道を問ふ　(2)我人に道を問はる

もし(1)の例から推していへば、「道人に我に問はる」とあるべき筈であるが、實際は(2)のやうに用ひられる。同じ所相でも(1)と(2)との間には、形の上に區別のあることをまづ注意せねばならぬ。それ故

人我が足を踏む　我が足人に踏まる

消防夫火事を消す　火事消防夫に消さる

このやうな所相も穩當でない。

消防夫火事を消す　(3)消防夫兵士に火事を消さる

この(3)の所相はどんな場合にも使用せられる。この時所相になるのは消すといふ他動詞ではなく、「火事を消す」といふ句である。この句が火事といふ目的と消すといふ他動詞とに分かれることは勿論であるが、この場合には火事を消すといふ句が所相になるのであるから、恰も一の自働詞のやうな趣がある。

能相
我足を踏む
我先を越す
我文を讀む

通常の所相では次のやうに、

親子を育つ

能相の文主は所相の標準となるが、(3)(4)の場合にはさうでない。さて働掛に對する受身のみを所相とすると、所相は他動詞專有のものとなるが、國語では「母子に泣かる」「我人に行かる」など自働詞にも所相がある。この點に關しても、子は從來の學者と說を異にするのである。これまでの說では、「母子に泣かる」を「子泣く」の所相と觀て居るが、さうでない。

能相
母泣く
夫病む
我行く

所相
母子に泣かる
夫妻に病まる
我人に行かる

(4)
我人に足を踏まる
我人に先を越さる
我人に文を讀まる

所相
子親に育てらる

我わが家に入る

我賊にわが家に入らる

かやうに相對すべきもので、所謂自動詞の所相なるものは第三種所相の一種である。今これを對比すると、

母　泣く
消防夫　火事を消す

これから推して考へるに、次の如き例でも能所兩相を對比せうとならば、かうあるべきものと思ふ。

能相
我　降る
我　棚引く

所相
我　雨に　降らる
我　霞に　棚引かる

母　子に　泣かる
消防夫　兵士に　火事を消さる

故に自動詞から轉じた所相は勿論、予の所謂第三種所相も純粹の所相ではなく、幾分か勢相の趣を具へて居る。「消防夫火事を消す」といへば消防夫に防火の能力のあることをいひ、「消防夫兵士に火事を消さる」といへば、兵士にその能力の移つたことを示めすので、所謂働掛受身とは甚だその趣を異にして居るのである。「消す」といふ働を受けるのは火事であつて消防夫ではない。要するに、所相勢相の全く分離して居ら

ぬことが、所相の使途を制限し、又自動詞をも所相たらしむる所以であらうと考へる。

	能相	所相	準所相
無對他動	母 子を育つ	子母に育てらる	母乳母に子を育てらる
有對他動	人我に道を問ふ	我人に道を問はる	
無對自動	母 泣く		母子に 泣かる

口語でも、所相の助動詞はレルとラレルとの二種類に分れて、いづれも下一段に活用する。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
讀ま	れ	れ	れる	れる	れれ	れ
褒め	られ	られ	られる	られる	られれ	られ

佐行變格動詞スル(爲)が名詞や漢語に結び付く場合の、無する、案じるなどは、所相でもまた無(ナク)される、案じられるなどゝいふ一種別の活用をすることがある。

第二項　勢相

可能の意即ち自から爲す力のあること及び動作の自然に起つて止め難いことを表はす助動詞は、文語口語とも凡て所相と同じで、たゞ命令形のないだけが違ふばかりである。

朝鮮語でも所相と勢相とはやはり同じ構造で、且勢相と動詞の自他との間には深い連絡(れんらく)があるらしい。國語でも次のやうな例を味うて見ると面白いと思ふ。

他動	所相	自動（口語）
思ふ	思はる（思はゆ　思ほゆ）	おぼゆ（覺） おぼえる
聞く	聞かる（聞かゆ）	きこゆ（聞） きこえる
煮る	煮らる（煮らゆ）	にゆ（煮） にえる
見る	見らる（見らゆ）	みゆ（見） みえる

口語では一層この語法を押し廣めて、行かれる、書かれる、勝たれる、忍びられる、報ひられるなどを行ける、書ける、勝てる、忍べる、報へるなどゝ用ひる。

第三項　使役相

使役相はおのれ手を下すことなく、他をして爲さしむる意の助動詞で、ス、サス、シムの三種類がある。この中ス|は四段・良變・奈變に、サス|はその他の活用に、シム|は總ての活用に接して、いづれもその將然形を受ける。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
使役相	せ	せ	す	する	すれ	せよ
	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

この中でス|は爲から轉じたものである。勿論使役相のス|と佐變の爲とは活用も違ふが、どちらかといへば下二段の方が寧ろ古體で、なほ一歩溯つて考へれば四段に活いた形跡もある。釣せす・舟出せす・立たす・知らすなど四段に活く敬語は、いづれもこの間の消息を傳へたもので、使役の意味の動詞の中でも通はす・遊ばす・驚かす・動かすなどは四段に活いて居る。その他舞はす・會はす(下二段)・回はす・合はす(四段)などの關係も參考する値がある。同じ使役相でありながら、何故四段・奈變・良變はス|、その他はサス|と兩樣に分れて居るかといふに、四段・奈變・良變は活用中の純粹なるものである

が、その他はいづれも有・爲・得の複合した雜り氣のあるものである。例へば浴む・起く・似るに爲が複合して、その他動形浴むす・起こす・似すを作つて居る。かやうに一度自他の變化に用ひられた爲は、これを再び使役相に使ふことが出來ぬ。それでこれ等の場合には浴み・起き・似などそれ〳〵の名詞形を作つて置き、その上に爲の使役相を加へたものであらう。爲はもと四段に活いたから、その使役相はサス|となるのである。その他なほ次のやうな例がある。

懲る	懲す
落つ	落す
怖づ	威す
迚ぐ	迚す
暮る	暮す
干る	干す
生く	生す
盡く	盡す
過ぐ	過す

懲り	懲りさす
落ち	落ちさす
怖ぢ	怖ぢさす
迚げ	迚げさす
暮れ	暮れさす
干さ	干さす
生き	生きさす
盡き	盡きさす
過ぎ	過ぎさす

延ぶ　延す
降る　降す
延びさす
降りさす

笑はす・飛ばす・鳴らすの類は以上の區別がなく、同じ形で他動とも使役ともなる。これを見ても、古人が自他といふ名目の中に使役相をも含めてゐたことの理窟がわかる。（八一頁參照）

口語の使役相助動詞もセル、サセルの二種類あつて、次のやうに下一段に活用し、セルは四段活用動詞、サセルはその他の活用に結び付いて、いづれもその將然形を受ける。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
讀ま	せ	せ	せる	せる	せれ	せ
褒め	させ	させ	させる	させる	させれ	させ

この中サセルは文語のサスと同樣に本來爲（ス）の使役相であるから、勉強する、運動するなどの使役相は、動詞爲（スル）を省き助動詞だけで、勉強させる、運動させるなどゝ用ひる。但し案じる、感じるのやうな、成語となつて爲（スル）の意義の失せた場合にはさうでない。使役相・勢相の助動詞は轉じて敬相となる。これは人を使役し又自ら爲す能力のある意から轉じたものであらう。敬相の搆造に就ても朝鮮語は頗る國語と似て居る。今これを對照して見るに、

(一) 動詞有（アリ）の複合するもの

朝鮮語で動詞有（アリ）をirといひ別に、orといふ形があり、略してiともoともなる。この兩者とも敬相を作るに用ひられる。

常語	敬語
hă (爲)	hă-o
i (有)	i-o
po (見)	po-o
chos (善)	choss-o

國語でも有（アリ）の複合で敬相が出來るが、次のやうな場合の動詞もやはり同樣の敬語であらうと思ふ。

tsutsusimu (謹)	tsutsusim-aru
kasikomu (恐)	kasikom-aru

(二) 動詞爲（ス）の複合するもの

hŭ-o-i	かしこまり思ほせばつゝしまり
i-o-i	おほやけの御かしこまり
po-o-i	
choss-o-i	

國語爲(ス)と同系の語は現在の朝鮮語には無い。然し別にsiki(爲(サ)せる)といふ語があつて、そのsiは次の如き諸動詞の使役相を作つて居る。

ant	(坐(スワル))	ant-ki	(坐(スワラス))
kam	(浴(アム))	kam-ki	(浴(アミサス))
köm	(黑(クロシ))	köm-ki	(黑(クロクス))
ssis	(洗(アラフ))	ssis-ki	(洗(アラハス))
nöm	(越(コユ))	nöm-ki	(越(コエシ))
pös	(脫(スグ))	pös-ki	(脫(スガス))

故にその使役相から歸納して、si(爲(ス))といふ動詞の嘗て存在したことが知れるのである。この爲(ス)siは日鮮兩語とも敬語に用ひられる。

朝鮮語			
常語		敬語	
köni	(步)	köni-si	(步)
chapsu	(食)	chapsu-si	(食)
chumŭ	(寢)	chuimē-si	(寢)

hă	(爲)	hă-si	(爲)

國語		敬語	
常語			
hirake	(開)	hiraka-se	
mochi	(持)	mota-si	
tsumu	(摘)	tsuma-su	
tatematsure	(奉)	tatematsura-se	
ahi-si	(會)	aha-si-si	
karu	(苅)	kara-su	
miru	(見)	mesu	

(三) p形の敬語

この敬語は比較研究の結果、予が新にかの延言(ノベコトバ)なるものゝ中から選び出したものである。波行延言に就いては既に動詞の條(七四頁參照)に述べたが、朝鮮語にもこれに相當するものがある。例へば

panki	(喜(ヨロコブ))	panka-p	(嬉(ウレシ))

此戸開かせ
弓とり持たし
菜摘ます子
豐御酒奉らせ
會はしゝをとめ
小田を苅らす子
大君のめしゝ野邊には

öps　(無)　öpsŭ-p　(ナイガシロニス)　(蔑)

mit　(信)　mitö-p　(シンヅ)　(シンヨウアリ)　(信用)

purk　(赤)　purkrö-p　(アカシ)　(ヘワカシ)　(耻)

atki　(惜)　atka-p　(ヲシム)　(ヲシ)　(惜)

これらはいづれもp音によつて動詞と形容詞と相轉換して、幾分か意義を和らげた傾がある。

國語に於ける波行の延言中にも、

humu　(踏)　huma-hu　(踏)

hiku　(引)　hika-hu　(控)

osu　(押)　osa-hu　(押)

uku　(浮)　uka-bu　(浮)

hakaru　(量)　hakara-hu　(計)

tsukuru　(造)　tsukuro-hu　(繕)

これ等の延言は皆その意義が寛やかなやうに見える。窘迫と寛容とは卑賤と尊貴とに對比する故に、このp音延言は日鮮兩語とも一轉して敬語となるのであら

う。

朝鮮語

常語　敬語

poi　(會)　poi-o-p

pat　(受)　patcha-p

ant　(坐)　anchu-p

yöt　(云)　yötchu-p

tŭt　(聞)　tŭtcha-p

moi　(侍)　moi-o-p

chapsu　(食)　chapsu-p

hă　(爲)　hă-o-p

國語

常語　敬經

imase　(在)　imasa-ho

mawosi　(申)　mawosa-hi

衣冠を願ず在さへど

政を申さむ

nore　（告）　nora-he
matsureru　（奉）　matsuro-he-ru
mese　（召）　mesa-he
tsugi　（繼）　tsuga-hi

敬相助動詞中口語に殘つてゐるのはレルとラレルとで、その活用は所相の場合と同じである。

第四項　指定

事物を指し定める意の助動詞に次の三種類がある。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
指定	なら	なり	なり	なる	なれ	
	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
		べく	べし	べき	べけれ	

(一)　ナリ　語源は「にあり」で、活用も良變有（アリ）と同じである。動詞・形容詞の連體形、名詞、副詞、豆爾袁波に接して「任（マカ）するなり」「嬉しきなり」「爲るなり」「溫厚なり」「君子なり」「宜（ムベ）なり」ばかりなどゝ用ひる。ナリの語源が「にあり」であるから、「武藏なる隅田川」「父なる人」などはよいが、「顏回なる者」の類は誤謬（ごびう）であるといふ説がある。これは二種の語を混合して居るための誤解で、「顏回なるもの」のなるが「にある」の約であるから惡いとならば、「隅田川なり」のなりも「にあり」だから同じく惡い譯ではないか。「父なる人」のなるは「にてある」と解けるが、「武藏なる」のなるを「にてある」と解くのも變ではないか。語を分析してその源に論及することは專門家の仕事で、實際語を使ふ場合には語源を考へる暇がない。「武藏なる隅田川」のなるはにとありとが發音の都合上假に結びついたもので、これをもとの二つに分けて「武藏にある」としても、意味上少しのさしつかへもない。「隅田川なり」のなりも語源は同じ「にあり」に違ないが、これを分けては意味が毀（こぼ）れてしまふ（勿論ぞこそなどが中間に加はる場合と、打消のにあらずとは別である）、丁度形容詞にもこれと同じ場合がある副詞形のくとありとが結びついて善かれ、惡しかれなどゝなるのは、假初の結合であるから、これを引き離して、善くあれ、惡しくあれとしても意義を傷けない。然るに已然形の善けれど、惡しけれどのけれは、既に一の活用に變じたものであるから、これを分離するわけには行かぬ。「武藏にある隅田川」といふやうな場合にこそにとありとは約まりもするが、「隅田川は武藏にあり」はどう

しても「にとあり」とが約まらぬではないか。

(二) タリ（「とあり」の約で、名詞の下につき「親たり子たり臣たり君たり平然たり」自若たり」など、用ひる。その語源の上からいうても、意義の上からいうてもナリとタリとは極近い關係を持つて居る。この兩者は助辭ニ、トと有（アリ）との複合したものである から、先づニとトとに就いて一應の觀察を下さねばならぬ。

親になる　雪になる
親と思ふ　雪と降る
友にす　取々に噂す
友とす　有々と見ゆ

これ等の例を見るに、ニは既定親になる」雪になる」、經過（降りに降る」取々に噂す）の意を含み、トは假定（親と思ふ」雪と降る）、現存（有々と見ゆ」有とある）の傾がある。「待ちに待つ」は初の待（マッ）が過ぎ去つて更に待つことをいひ、「有りと有る」は二箇の有（アリ）の共存することをいふ。「人になる」は既に成り終れること、「人と爲（ナリ）」は卽ちその爲（ナレ）ることの最中（モナカ）を指すものである。故に予はこの二助辭を半過去助動詞ヌ、ツと關聯して説明しようとの考を抱いて居る。

故に指定助動詞ナリ、タリに於ても同一の關係が成立する。

君ならず　温厚なり
君たらず　平然たり

「君ならず」はその人が君主にあらず、他の資格者なること、「君君たらず」は事實君なれども、その行の副はざることをいひ、また「温厚なり」はその人の性質で不斷の樣であるが、「平然たり」は唯その場合一時の容態に過ぎぬのである。

ナリ、タリに對する朝鮮語は nira（過去助動詞）tora（半過去助動詞）で、體言用言の別なく一樣に接續する。

tărk-i-nira　(鷄なり)
tărk-i-töra　(鷄たり)
ka-nira　(行きぬ)
ka-töra　(行きたり)

勿論名詞の場合には中間に動詞i（有（アリ））の略體iを挾んである。思ふに國語に於ても本來は名詞とナリ、タリとの間に必ず有（アリ）の意が含蓄（がんちく）して居たものであらう。ナリ、タリは時に分解して助辭ニ、トを形の上に現はすことがある。

人にして
人として

人――
人とす

人にあらず
人――

人にぞありける
人――

(三) ベシ　未來を推定し、轉じて決定指揮の意を示す語で、諸動詞の終止形に連なる。但し良變のみは連體形に接するが、これは助動詞の接續上に活用の古格が殘つて居るからである。ベとめとは相通の音であるから、べしは未來助動詞のむと關係があるらしい。

口語の指定助動詞はダとデスとの二つである。ダもデスも共にデと活用する。このデがニテの約であることはいふまでもない。それ故ダもデスも文語のナリから轉じて、種々の變化を受けた末、出來たものである。

第五項　打消

打消の助動詞に次の三種がある

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね
		まじく	まじ	まじき	まじけれ
			じ	じ	じ

(一) ズ　單純に動作を打消す語で、諸動詞の將然形を受けて、行かず・落ちず・見ず・有らず・來ずなどゝ用ひられる。この助動詞の活用は佐行と奈行とに跨つて、一寸趣が變つて居るが、然しズの延言を見るに「爲便乃不知」有勿久爾」などゝなり、副詞に「莫思吾背」などの莫あり、否あり、豈あり、形容詞の語根に無あり、その他古く「不忘不有取久乎不知」などのニもあるから、もとはナニヌネと活いたものと思はれる。

打消助動詞は動詞の直下にあつて否定の意を示す。然しながらまだ活用をせぬ副詞的時代には、勿行(na-yuki)勿來(na-ko)のやうに、動詞の前に置かれたものと思はれる。朝鮮語では今もやはり打消語 ani を動詞の前に置く。

ani-ka　(行かず)

an-ir　(有らず)

この點でも沖繩方言は參照の値がある。卽ち有の打消に ara-n nê-ran の二種があつて、前者は國語「有らぬ」と同じく動詞の下に打消語があり、後者は國語「無し」に相當する打消語が動詞の前にある。

ずは打消のじと同じく、爲がその前に來る打消のぬと同化した結果、濁を帶びたものである。

(二) マジ　推量の打消で、諸動詞の終止形(良變のみは連體形)を受け、「行くまじ見るまじ」爲(ス)まじ」有るまじ」など丶用ひる。まじの意は未來助動詞むと打消助動詞ずとを合せたものである。

(三) ジ　諸動詞の將然形を受けて、「行かじ」爲(セ)じ」まけじ魂」有らじかなど丶用ひられるこれはまじに比べると、未來の意のまがないだけに意味が少し強い。語源はずの所に述べた通りである。

口語では打消助動詞のズがヌとなり、マジがマイとなる。別に形容詞ナシから轉じたナイといふ助動詞が新に加はつた。

第六項　過去

過去の助動詞に次の六種類がある

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
過去	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
	たら	たり	たり	たる	たれ	
	て	て	つ	つる	つれ	てよ

(一) ツ　諸動詞の連用形に連なつて、半過去(完了)の意を示す。

我心春の山邊にあくがれて長々し日を今日も暮しつ

現在に接近した過去を示すもので、現在もその一部分に加はることがある、例へば「謂(イヒ)ツべし」は「謂フべし」と意義が近い。「雪はふりつゝ」などのつゝは、このつを重ねたもので、現在進行中の意を示す。

		き	し
けら	けり	けり	しか
せら	せり	せり	せる
			せれ

(二) ヌ　多分「往(イ)ぬ」から轉じたものであらう。諸動詞の連用形を受け、たゞ奈變の死ぬ、往ぬのみには連らぬ。この助動詞はつよりも過去の意が強い。「白き灰がちになりぬるはわろし」梓弓おして春雨今日ふりぬ」などの類である。

見(ミ)つる・聞(キ)つる・讀(ヨミ)つるなどつは他動詞に限り、散りぬる・降(フ)りぬるなどぬは自動詞に限るといふ説もあるが、必しもさうでない。

朝鮮語にもツ、ヌに對する活用はあるが、ヨ(有(アリ))と複合して始めて單獨の助動詞となる

る。

tö-ra　（たり）　半過去助動詞

ni-ra　（なり）　過去助動詞

既に指定助動詞の條に述べたやうに、ナリ、タリとニ、トとは相對して過去と半過去との關係を示して居るから、

つ　て（と）　たり

ぬ　に　なり

かやうに兩者を對比して、てを助動詞つの一活用とすれば、弖爾袁波にもぬの一活用と見られ、たりの半過去助動詞たると同時に、なりも亦過去助動詞たるべき關係である。それ故指定の助動詞たるナリは、その系統に於て朝鮮語 nira と同一らしい。

敷きに敷く　生とし生けるもの

入れに入れよ　吹きと吹く

明けに明く　有りとある

降りに降る　見と見る

この種の類例に徵すると、ニ、トの間に過去・半過去の差があるやうに思はれる。また

盛に　態と　定て

竝に　遙々と　兼て

常に　廣々と　增て

更に　から〳〵と　敢て

ニ、トがかく副詞の語尾となることは、その動詞的起源を證明するものである。

（三）タリ　つとありとの複合したものであるから、その意義も隨て現在に近い。諸動詞の連用形に連なる。

ふる里は春めきにけりみよしのゝみかきが原を霞こめたり

（四）セリ　爲と有との複合したもので、他の助動詞とは稍趣が違ふ。

秋ふかみ青葉の山も紅葉せり名をば時雨も染めじと思ふに

爲の用法中には奉ず・存ず・無す・欲す・時雨すなどの如く、成熟の一語と見るべきものと思す・聲す・案內す・便すなどの如く、多少原義の明なるものとがある。それ故このせりにも一種の助動詞と見るべきものと、佐變爲の活用とすべきものとの區別が自然あらうと思ふ。

このせりと同樣に、四段活用の連用形とありと結ぴ付いて、一種の半過去を作ること

がある。例へば行けり・讀めり・打てりなどの類である。

この半過去は往々四段以外の活用にも誤用せられることがある。勿論助動詞中にはせり(爲有)、めり(見有)、けり(來有)などの例もあるから、本來は廣く他の活用にも通じたものであらう。

(五) ケリ　きとありとの複合したもので、同じく諸動詞の連用形に連なる。

ふる里となりにし奈良の都にも色はかはらず花はさきけり

このけりは有の複合して居るだけ、過去時を表はす以外に、多少これを眺むる氣味があつて、「心なりけり」浮世なりけり」など、說明もしくは詠歎の意を表はすこともある。

(六) キ　過去の助動詞で、諸動詞の連用形に連なる。但し加行變格には、來し・來しかともも來し・來しかともありて、「來き」の例なく、佐行變格には爲し・爲しか・爲きとあつて、爲し・爲しか・爲きの例がない。この助動詞も亦その變化が加行・佐行に跨つて居るが、その中キは來より出て、シは爲より出たものと思はれる。「知りせば」寢覺めざりせば」などのセにも過去の意があつて、「知りしかば」寢覺めざりしかば」と相對して將然と已然とを作つて居る。

口語の過去助動詞はた(音便でだ)ともなる)の一種である。これは半過去助動詞つかから轉じたもので、てと活用する。しかし「本を讀んで居る」酒に醉うて寢る」などは、なほ半過去助動詞と見るべきものであらう。

第七項　未來

未來の助動詞は次の一種類である。

未來	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形
			む	む	め	

このムは次のけむ、らむ、めり、まし、打消のまじ等のま、む、めと同じく、動詞見より出たものであらう。諸動詞の將然形を受けて、押さむ・任せむ・見むなどゝ用ひる。

鏡山いざ立よりて見てゆかむ年經ぬる身は老やしぬると

口語の未來助動詞は、四段活用ではう、その他の活用ではようである。

以上過去未來の助動詞に就て概要を述べた。然るに過去助動詞を重ねて、更にその意を深むることがある。

わびつゝも昨日ばかりは過してき今日は我身の限なるらん

郭公峰の雲にやまじりにし有とはきけど見るよしもなき

又過去のきと未來のむとが集つて、ケムといふ形が出來る。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形
			けむ	けむ	けめ

これは過去の想像を表はすもので、例へば

あれはてゝ風もさはらぬ苔の庵は我はなくとも露はもりけむ

又つ、ぬ、たりとむとが重なれば、

ありとても幾世かは經る韓國の虎ふす野邊に身をも投げてむ

形こそ深山かくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ

又つ、ぬ、たりとけむとが重なれば、

夏山に戀しき人や入にけん聲ふりたてゝ鳴くほとゝぎす

また、假に身を過去に置いて、その時を現在と觀ずることがある。

我は明治五年に生る　昔兼好といふ法師あり

正成尊氏と戰ひて湊川に戰死す

第八項　推、量

推量の助動詞に左の四種がある。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形
推量			らむ	らむ	らめ
		めり	めり	める	めれ
	（まく）	まし	まし	まし	ましか
		らし	らし	らし	らし

此等のむ、め、まは見、ら、りは有、しは爲より出たといふことは、既に度々述べた通である。

(一)　ラム　諸動詞の終止形（良變のみは連體形）に連つて、推量を表すものである。

春霞何かくすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを

(二)　メリ　らむと殆ど同じであるが、らむは有・見の約で、丁度位置が轉倒して居る。だけ、意味にも多少輕重の差がある。即ちらむは疑を挾んでその意輕く、めりは決定の意が稍重い。

立田川紅葉みだれて流るめりわたらば錦中や絶えなん

(三)　マシ　諸動詞の將然形を受けて未來を推量する。

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこゝろはのどけからまし

上にましかばを用ひると、その下をましと結ぶのが定である。

山里にちりなましかば櫻花匂ふさかりも知られさらまし

ましのまが、未來のむと同じく、見（ミル）より出たことは明白である（打消のヌと形容詞ナシとの關係と同じ）、立まく・行かまくなどのまくは、このましと同一の活用に列すべきもので、またましかばに對するませばがあつて、已然將然を分つて居る。過去のきの條に述べたことゝ對照して見るがよい。

（四）ラシ　諸動詞の終止形（良變のみは連體形）に連つて、現在の推量を表はす語である。

みよしのゝ山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり

らしのらは勿論有（アリ）で、しはべしまじのし、じと同じく形容詞的のものであらう。らしき（「格良思吉（ウツラシキ）」）といふ形もある。

推量の助動詞中、らむは口語でろうとなり、過去及指定の助動詞たに加はつて、たろう、だろうとなる。またらしは口語でらしいとなり、形容詞のやうにらしく、らしけれと活くこともある。

第九項　詠歎

詠歎（えいたん）の助動詞は指示の助動詞なりの轉じたもので、指示は連體形を受けるに、詠歎は終止形（良變のみは連體）を受けるといふだけが違ひである。連體形を受けるのはその下に名詞を省（はぶ）いた心もちであるから、例へば「人まつむしの聲するなり」といへば、聲する野とか庭とかいふ具體的の意味があるが、「人まつむしの聲すなり」といへば爲（ス）と見做（みな）しただけに、その意義が幾分か抽象的で自然餘情が添はるわけである。但し四段・一段の如く終止と連體との形が同じ場合には、意味の上から區別するより外はない。

みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

秋の野に人まつ蟲の聲すなり我かと行ていざとぶらはん

第十項　比況

比較する意の助動詞は、動詞・形容詞・助動詞の連體形若くは豆爾袁波（テニヲハ）の、が、を受ける。

見るが如し　斯くの如し　我が如く　花の如し

比況			
	副詞形	終止形	連體形
ごとく	ごとし	ごとき	

この助動詞は朝鮮語形容詞 kat（同じ）と同一語系の語である。

わがごとく物や悲しきほとゝぎす時ぞともなく夜たゞ鳴くらむ

(乙) 豆爾袁波

第一項 名詞につく豆爾袁波

(一) ガ、ノ　これは動作・形状の主體たる名詞又はこれに準ずべきものを取り立てゝ示す豆爾袁波で、例へば「鳥が鳴く」春風の吹く」沖に見ゆるが淡路島なり」などである。このが、のと同じ意味で、その用例の古い一種のイといふのがある。例へば「木乃關守伊」家有妹伊」伴健岑伊」一日太爾君伊之哭者」二禪師等伊」帝止立天在人伊」などで、其他動詞の下について、「捨つるい」これを持つい」などとも用ひる。此用法は古くもあり、且つ一局部に偏して居るけれども、丁度朝鮮語にもこれと同じiといふ助辭があるので、古い豆爾袁波の名殘であると思はれるから、こゝに添へて置くのである。

(二) ノ、ガ　これは名詞と名詞或は名詞と見做すべきものとの間に立つて、附屬の意を示すものであるが、それから轉じて次の様に色々の關係をも示めすやうになつた。

所有の意を示めすもの。「君が代」我が身」人の子」

名詞の意味を限定するもの。「天が下」世の様」寢るが中」下の關」栗津が原」

修飾の意のもの。「花の顏」露の命」

の、がはその次に來る名詞を省いて、「此歌は或人の在原のときはるがともいふ」昔のと今のと」古の今の古き新しき歌」人麿がなり」など用ひることがある。

(三) ツ　これは所屬を示めす意のの、と同じ性質のものであるが、その用法が古く且つ制限せられて居る。例へば「天つ風」中つ國」前つ君」沖つ波」庭つ鳥(鷄)」末つ方」影つ面」などの類で「自づから」手つから」心つからなどのつもこれである。このつは今では多く單語の中に含まれて居る。例へば獸(ケダモノ)毛つ物」、表(面つ邊)、外(背面)、菓(木つ物)などいづれも既に一箇の名詞となつて居るが、そのつはもと〳〵この豆爾袁波である。これと同じ豆爾袁波が朝鮮語にもあつて、今も幾分は用ひられて居る。例へば Pata（海）と mur（水）とを合せて、pata-t-mur（海水）といふ類である。

(四) ニ　これは動作・形状の落着する地位を示すもので、例へば「友に與ふ」山に登る」意とするに足らず」家に住む」花見に行く」信に近し」等の類であるが、又これより轉じて「鬼に金棒」馬の耳に風」など、添ふる意のものもあり、「道に說く」の如く位置を示すものもあり、「犬に噛まる」雨に降らる」など發動の起點を表はすものもある。にを敬語に用ひて、「師の君にも」大臣にはなどゝいふことがあるが、これと同一の語法が朝鮮語にもある。

茲に一說として述べて置きたいことがある。それはにを普通に與格(dative)と考へて居るが、これは寧ろ位格(locative)又役格(instrumental)から轉じたものであらうといふ考である。卽ち「家に住む」淺間の嶽に煙の立つを見て」道に聽きて途に說く」は明かに位格に用ひられて居る。又「道に人に說く」といふ場合の二つのニは意味が同じでない。「人に」のにはもとより與格であるが、「道に」のにはまた多少役格の樣な心持もする。

蜜柑は紀州にて產す　（船にて行く）
蜜柑は紀州より產す　（船より行く）
蜜柑は紀州から產す　（船から行く）

「にて產す」より產す」から產す」はいづれもに產す」と同じ意であつて、これ等をにて行く」より行く」から行く」などの役格と較べれば、にに役格の意義が含まれて居るやうに思はれる。「花見に行く」病に仆る」又にはゐといふ豆爾袁波で表すのであるが、これは明かに動詞ヰ(有り)から轉じたもので、國語カラ、ヨリのら、りに相當するものである。助動詞なりの條を參照してもらひたい。

(五) ヲ　これは他動詞の目的及び使役相の標準たる名詞を示すもので、「書を讀む」花を見る」人を笑はしむ」の類であるが、又「道を行く」橋を渡る」家を出づ」などの如く、自動詞に付いて、動作の行はるゝ地位材料等を示すこともある。その他にに通ふをといふ働の目的物として女を捉へたもので、丁度此方から故らに進んで、女の方に行くといふやうな心持が含まれて居る。朝鮮語には今でも「友を逢ふ」雨を遭ふ」人を書を贈る」馬を乘る」などゝいふ用法があるが、國語でも地方の方言中にはまだこの語法の殘つて居る處もある。「苦を荒み」瀨を早み」などのをを感動詞と見る說もあるが感服が、出來ぬ。これは「心を安んじて」と同じ構造のもので、下に動詞を省いたものと見ねばならぬ。また「月見れば」のやうに、この豆爾袁波を加へぬことが多い。それ故「月を見む」といふべきを「月は見む」ともいふ。

(六) へ　これは方向を示す豆爾袁波で、前(目邊)、後(尻邊)、古(往し邊)、夕(夕邊)表(面つ邊)などのへと同語原から出たものである。それ故地位を示す豆爾袁波のにと比べると、休

止と進行との別があるから、古人は「僧正遍照が許に奈良へ罷りける時」筑紫へゆくと て明石の浦にて」はつせへまうで侍りける道にさほ山のもとにて」など、明かに使ひ別けて居る。

(七) ヨリ、カラ これは「今日より」明日から」など何れも動作の起點を示すものである が、この中のよりだけは、又轉じて「山より高く海より深し」など、比較の標準を表はすこともある。また「にて」の意に用ひられるより、からがある。例へば「いはけなくより宮の中より生ひ出でゝ船から行く」の類で、沖繩方言には今日も inma kara ichun (馬から行く)といふ用法が殘つて居る。

古くはよりのりを省いて、よとも又通はしてゆとも用ひて居る。例へば「あが松原よ見渡せば」田子の浦ゆ打出でゝ見れば」などである。かやうにりをとり除いてもさしつかへがないのを見ると、からのらも同じことで、よりからのらりはもと獨立の豆爾袁波であつたのではなからうかと思ふ。からのかは都(宮處)・其處・隱處・陸(國處)・海處・丘(峽處)などのかで、處といふ義であるから、「自から」手づから」さながら」枝ながら」などのかも、處の意に解して「己の處」手の處」枝の處」とすると、この場合にもらが別に殘る。朝鮮語にはoといふ豆爾袁波があつて、「にて」の義に用ひられて居るから、自分はこのらりもこれと同義の獨立の豆爾袁波であつたらうと思ふのである。「沖より舟どもの漕ぎ行く」雲間よりさわたる月」泛海往」渉歩從行者」などのから、よりはこの古義を存して居るものではあるまいか。この問題はなほ十分研究すべきことであると思ふが、この他にも出所不明のラ、リ、ロが隨分ある。「さかしら」花見がてら」夜のほどろ(程)」ほとり(端)」味ら」衣寒ら」詫しら」悲しら」友許」などは、いづれも參照すべき價値がある。また「吹からにあきの草木のしをるれば」寢ぬ夜こそ數つもりぬれ時鳥聞く程もなき一聲に」より」浮きて行くもみぢの色の濃きからに」川さへ深く見え渡る哉」などの樣に原因を示すものがある。「國がらか」神がらか」人がら」事がら」手がら」折から」も同じ部類のものと思はれる。これ等のからは本條に說いたものと同じ起原のものか、研究問題である。本條のからのかは「處」とい名詞だと思はれるが、原因を示すからも或はこれと同一起源であらう。然し古く「故」をかれと訓ませてあること、また朝鮮語に「故」の字音と豆爾袁波oとを結び付けて ko-ro と用ふることなどを合せて考へると、これは普漢籍の讀方を朝鮮から傳へた時に、この訓を彼より學んだのが、遂に一種の豆爾袁波となつたものではあるまいかとも思はれる。暫く疑問として述べて置く。

(八) ト これは普通「親と行く」友と逢ふ」人と語る」兄と住む」の如き指定の意のものと

考へられて居るが、此他にもまだ種々の用例がある。「雨と降る」花と散る」見にと來なまし」親と頼む」神と崇む」とかく」とばかり」ともすれば」とても」とある家」などは、いづれも語を省略したものと解すればよいが、「からからと笑ふ」御手と物を賜ひて」我と我身を責む」などのやうに副詞をつくること、及び「水になる」氷となる」などの例に徴するに、といふ豆爾袁波はにと相對すべきもので、その起源が動詞だといふことは殆ど疑がない。なほこのことについては助動詞ナリ、タリの條を參照せられたい。また同一の動詞・形容詞を重ねて、その間に挟んで用ふることもある。例へば「ありとある」吹きと吹く」しとする」生きとし生ける」うれしともうれし」などの類である。

このと形は同じで、漢字「與」の意味に用ひられるものがある。これは文中に竝列する同等の語句を接續するもので、語句の數だけ一々繰返すのが定まりである。

流れ木と立つ白浪とやく鹽といづれかからきわたつみの底

(九) マデ これは「至り及ぶ」意の豆爾袁波で、またし(全)みつ(充)むた(共)など、同一語原のものであらう。朝鮮語にも mit (及ぶ)といふ語がある。

我君は千代に八千代にさゝれ石の巖となりて苔のむすまで

第二項 種々の語につく豆爾袁波

(一) ハ これは一の事物を引離して他と對照する意のもので、例へば「山は高し」といへば、その裏に「海は深し」などゝいふ對照の語句が含まれて居るのが本義である。

人はいさ心も知らずふるさとは花ぞむかし香に匂ひける

などもと古里とを對照せしめたものである。

故草野文學士がこのはの一種で例へば「象は體大なり」などの象はを新たに總主と名づけられた。これは氏の創見で、「體大なり」といふ一說話の上に更らに象はといふ主語が冠さるのであるから、全く主格が二重になるわけである。然しこのはもその作用は同じで、「象は體大なり」の裏面には「蟻は體小なり」などいふ對句が含まれて居るべきで、なほ「我は梅は月瀨を愛で櫻は芳野を賞す」などの例もある。名詞のみでなく、其他の品詞をも同樣に他と對照して指示する。「文のみは見む」春日野(ヲ)は今日はなやきそ」今日までは忍びたれど」見すはありとも」かくこそは思へ」山よりは高し」雲か但しは山か」の類は皆さうである。しかしこのはは後世使用の區域が廣くなつて、主格のが、のと同じく用ひられるやうになつた。

このはの語原はもの或はことの義で、古くは「者」の字を宛てゝ居る。朝鮮語 nin は今も者、所の義である。又このはは時として「行かずんばあるべからず」などの如く、濁を帶

びることがある。

(二) モ　これは「色をも香をも」妻もこもれり我もこもれり」など、同じ樣の事物を重ねて擧げる時に用ひる豆爾袁波である。

これやこのゆくもかへるも別れては知るもしらぬも逢坂の關

このもとあれとが重なつてもあれとなり、更にそれが約まつてまれとなる。

君といへばみまれみずまれふじの根の珍らしげなくもゆる我戀

(三) ゾ　これは多くの中で一つを指し定むる意の豆爾袁波で、その末を結ぶ用言は必ず連體形を用ひる。この豆爾袁波は「其」の濁つたもので、それと指し示めす意のものであるといふのが昔からの說である。

「萬葉集」には多く其曾など淸音の字を宛てゝあるから、この語原說は參考とする値はあらう。即ち「うまし國ぞ」の如く、强く指し示したものと考へられる。「あゆひ抄」には「凡そはそれ、こそはこれそれをつゞめたるあゆひなり、是をもとゝして見るに、みな事物を一すぢにさしさだめていふ詞なり、たとへば石と玉とを人のもたるをまじへ置きながら、それぞ玉よとをしふるなり、又玉をえりいだして、わが手にとりては、これこそ玉なれといふべし」と說いてゐる。

のこりなく散るぞめでたき櫻花有りて世の中はてのうければ

また「切るゝぞ」と唱へ、語の終に置いて指し示す意のものがある。活用言には常にその連體形に連なる。

名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな

憶良等はいまは罷らむ子泣くらむもその母もあを待つらむぞ

これと同じ樣で、疑ひ問ふ意のぞがあるたれ聞けとなく雁かねぞ我宿の尾花が末を過ぎがてにして

また文の終に「云々なりとぞ」などいふぞは、その下に「いふなる」などの結を省いたものである。

(四) ナモ、ナム(ナン)　これははと略同じ意の豆爾袁波で、種々の品詞を受けて、これを他と對照するものである。この豆爾袁波は文には多いが、歌には甚だ少ない。その末を活用言の連體形で結ぶことはぞと同じである。然し文章の末に「かくなん」などゝ下の結を省いて用ふることもある。

いつはなもこひずありとはあらねどもうたて此ごろ戀のしげきも

さくらばな山に咲くなん里のにはまさるときくを見ぬがわびしさ

(五) シ　これも「其」から出たもので、指し定むる意の豆爾袁波である。

いつまでか野邊に心のあくがれん花しちらずばちよもへぬべし

いつしか」必ず」しも」なきにしもあらず」えにし(緣)はてし(果)などは今日も用ひる。また「生とし生ける」植えし植えば」など、同じ動詞の間に挾むこともある。

(六) コソ　これは多くの中から一つを擇び出す意の豆爾袁波で、その末を活用言の已然形で結ぶ定めである。

春の夜のやみはあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくるゝ

また古く「ゆめに見えこそ」風なふきこそ」清く照りこそ」遊びのみこそ」など、願望の意を表はすものもあり、又「大將こそ」父こそと呼べば」などの如く、呼びかくる意のこそもある。これ等は何れも下に結がない。

(七) ダニ、スラ　これはいづれも事物の一端を擧げその餘を推してしらしむる意の豆袁爾波である。

春がすみ何かくすらん櫻花ちるまをだにもみるべきものを

たきの音をいかに聞くらん都すらものあはれなる頃にはあらずや

口語でだには「でも」すらは「やはりなほ」(「萬葉集」に尚を充つ)といふ位の心もちであるが、古今以後はだにをすらと混用するやうになつたから、今は殆ど兩者の間に區別を立てることが出來ない。

(八) サヘ　これはあるが上になほ添へ加ふる意の豆爾袁波で、「萬葉集」には副の字をあてゝある。多分「添(ソヘ)」の轉であらう。

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれど彌常葉の樹

(九) ノミ、バカリ　この二つはいづれもよく似た豆爾袁波で、たゞそれ一つで他になきをいふものである。「あゆひ抄」に「のみとばかり二詞よく似て、ことのほかたがへり、云々のみは其一すぢをあらためぬ心あり、ばかりは其ひとつにてふたつみつにおよばぬ心あり」と說いてある。

ひとりのみ眺むるよりは女郎花わがすむ宿に植えてみましを

名にめでゝをれるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな

(十) ヤ、カ　この二つはいづれも疑ふ意の豆爾袁波で、文中にある時はその末を活用言の連體形で結ぶべきものである。

いつのまに紅葉しぬらん山さくらきのふか花の散るを惜みし

花のちることやわびしき春かすみ立田の山のうぐひすのこゑ

然しながら、この二つの豆爾袁波の間に幾分の區別が元來ありはせぬかと思はれるのは、や、かが動詞・形容詞・助動詞をうけるとき、やは常にその終止形、かは常にその連體形に續くといふ差のあるのでもわかる。

ちる花もあはれと見ずやいそのかみふりはつるまでをしむ心を

明けぬるかと川瀬のきりのたえ〴〵にをちかた人の袖の見ゆるは

「あゆひ抄」には、かを「思ふか」(人の子を男子か女子かと思ふ類)、やを「問ふか」(人に子はあるかなきかと問ふ類)と名づけて居る。また

聲たえず鳴けやうぐひすひとゝせに再びとだに來べき春かは

もろともになきて止めよきりぎりす秋の別は惜しくやはあらぬ

などのやうに、疑の意から轉じて反語となるやに就ても、「あゆひ抄」は「やはかはに似て、彼はおしなべたる理によりて靜に、これは目のあたりの勢によりて表をおさふるを違へりとす、これかとやのたがひめなりと」と說明して居る位で、古人も既にその間に差別あることは認めて居つたのであるが、朝鮮語にも疑問の豆原袁波に ya, ka の二種類があつて、其中のやは現在、かは多く未來の疑に用ひられてゐる。これを推して考へるに國語のや、かにも或はこれと同樣の區別が本來あつたのではあるまいか。

たとへば「來や」「來や」「來るか」「來るか」などを比較して見ると、「來や」「來や」の方は既に約束した人の來るのを待つ場合であるが、「來るか」「來るか」の方はさうでなく、或は來るであらうかと、未來にかけて疑ふ意を帶びて居る。勿論これは比較研究上もとゝはさうであつたらうといふのであるから、實際上歌文を解釋する場合に、徹頭徹尾かく心得べしといふのではない。然し「明ぬるか川瀬のきりのたえ〴〵」にをちかた人のそでの見ゆるは」などの樣に、過去の場合にも「あけたのであらうか」とやはり未來の意味が添うて居るのである。

又や、かを動詞の已然形に續けて、疑または反語とする一種の用法がある。

しほたるゝ蜑の衣にことなれや結べどもなほあわに見ゆらん

山科の音羽のやまの音にだにひとのしるべくわがこひめかも

あれにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ

この類は多くなれや、たれや、けれや、ぬれや、めや、らめや、めかもと續いてゐるが、感動詞のやと甚だまぎれ易い。これはもと過去に就て疑つたものらしく思はれる。何・誰・幾等の下に來る疑問の豆爾袁波は大抵かである。

誰がための錦なればか秋ぎりのさほの山べを立ちかくすらむ

但し前條に述べた已然形に接する場合にはやを用ひる。この點から考へてもかは未來を疑ふものであると思ふ。

第三項　動詞につく弖爾袁波

(一)　バ　これは原因結果を表はす兩句の間をつなぐ弖爾袁波で、活用言の已然形を受けると既定實在の意を表はし、將然形を受けると未然假設の意を表はす。

月見れば千々にものこそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねど

あはずして今宵明けなば春の日の長くや人をつらしとおもはん

又別に「のに」の意の一種の古格がある。

見てもまたまたも見まくの欲しければ馴るゝを人は厭ふべらなり

この類のばの下に「然らぬ理なるを」といふ意を含めて、普通のばの如く解すべしといふ說もある。

(二)　トトモ、ド、ドモ　これはいづれも原因とその反對の結果とを表はす兩句をつなぐ弖爾袁波で、とともは動詞の終上形、形容詞の副詞形に接して、未定の意をなすものである。

あらしのみふくめる宿の花すゝきほにいでたりとかひやなからん

今日來ずば明日は雪とぞふりなまし消ずばありとも花と見ましや

終にゆくみちとはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

ひとふるすさとをいとひてこしかども奈良の都もうきななりけり

朝鮮語にもこれと同じtoといふ弖爾袁波があつて、「有れど」をira-toといふ。

(三)　ニ、ヲ、ガ　いづれも活用言の連體形に接して、事の意外に出でたことをしめすものである。この中がは古いところにその用例がない。

有明の月はまたぬに出でぬれどなほ山ふかきほとゝぎすかな

ゆきとのみ降るだにあるを櫻花いかに散れとか風のふくらん

(四)　テ　動詞・助動詞の連用形に連り、一事を終へて他に移る意を表はす弖爾袁波でこれは半過去助動詞つの活用から出て居る。

春すぎてなつ來にけらし白砂のころもほすてふ天の香山

(五)　デ　これは動詞・助動詞の將然形に連り、打消の意を表はすものである。

中々に消えはきえなで埋火のいきてかひなき世にもあるかな

(六)　ツヽ　これは半過去助動詞つの重なつたもので、「雪はふりつゝ」は「降りつ降りつ」の義である。

音羽やま音に聞きつゝあふさかの關のこなたに年をふるかな

第六章　文法上の誤謬

文法上の誤謬は大抵類推の誤から起るものである。尤も言語の發達と類推作用とは大關係があつて、これがために絶えず變遷して行くものであるから、文法上の誤謬は決して絶對的のものでない。世人の多數がこれを認容すれば既に誤謬ではなくなるのであるから、この點は大に注意しなければならぬ。文部省が明治三十八年に文法上の許容案を告示したのはこれが爲である。今左に文法上の誤謬中最普通なるもの數條を擧げて説明を試みよう。

(一)　音便の混同より起る誤

發音は同じくウでも、請はコフ請てはコウテである。同じイでも、強てはシヒテ解てはトイテである。これはいふまでもなく、請うて・解いては請ひて・解きての音便であるからである。それを區別せずに、請ふて・解ひてなどゝする誤は隨分多い。

誤	正
道を問ふて	道を問ふ
人に向ふて	人に向ふ
我も行かふ	我も行かふ
書ひて遣る	書ひて遣る
善ひ處	善ひ處
大ひに笑ふ	大ひに笑ふ
強ひ人	強ひ人

右の諸例はいづれも上段に掲げた類の假名遣から類推して、下段のやうな誤が出來たのである。この他「忠孝を全ふす」「禮義を正しふす」なども同じ類の誤である。

(二)　活用の混同より起る誤

ヒ、ヘは動詞の活用中でイ、エと發音せられるから、ハ行活用とヤ行活用との動詞は相錯誤して用ひられることが多い。

誤	正
月日を數えて待つ	月日を數ひて待つ
師の教えに從ふ	師の教ひに從ふ
世に聞えたる人	世に聞ひたる人
消え行く火影	消ひ行く火影

旦夕の貯へなき人
念佛を唱へて
生ひ行く身
煤拂ひ

動詞の活用は時と共に變遷して行く。文語と口語とに就いては既に九一―九六頁に述べて置いたが、他の語と複合する場合にも多く原活用を失ふものである。例へば佐行變格の爲も、無くす・醸す(醸す)となれば四段で、良行變格有・居も薫る(香居る)・御座る・居るとなれば或は四段或は一段となり、一段活用の見も、改む、眺むなどの場合には二段で、來は加變出來(デク)は上二段である。それ故文法上の誤謬中活用の誤は特に多い。次に掲ぐる諸例は下二段・上一段・下一段・佐行變格・奈行變格・良行變格等の諸活用を誤つて四段活用に類推したものである。

正	誤
休息を許したり	彼の自由に任したり
月日を暮らす	約束の日を遅らす
よく説き諭して	幾度か讀み聞かして

時の覺へめでたき身
海山越へて
老ひ行く身
善き報ひ

人に促されたり
義務を果さす
敵を斬り殺す
力を試さす
筆を執りて文を草す
隠さずしていふ
國事に盡す人多し
毫も惜む所あらず
會はねども噂は聞けり
その住居相隣れり
よく泣く子
民の歓ぶ聲
風に戰げる木
床に挿しゝ花
彼は我意を知れり

巧に譯されたり
能く辛抱さす
賊を蹴り倒す
衣を着さす
弓を射りて敵を倒す
熟さずして落つ
よく解す人なし
何の恨むことかあらん
死ねども名は殘れり
その實質は異れり
早く起く人
梅花の綻ぶ頃
君に捧げる身
我軍の占領しゝ島
士道今や廢れり

友を信じて交れり
雪を投げて戯れり

次の例は四段活用を誤つて佐行變格に類推したものである。これは國語の音韻法として同音の重さなるのを忌む(一四頁參照)から、シシといふべきをセシと誤つたものである。

我を愛せし母
花をら散せし風
入學を志願せし日
學業に志せし時
政府の提出せし豫算
彼の遺せし逸話
曾て約せし如く
兼て申せし如く

(三) 終止形と連體形との混同より起る誤

文語の來・爲・延ぶ・下る・得・有りを口語で・來る・爲る・延びる・下りる・得る・有るといふやうに、諸動詞の終止形は連體形と同化する傾がある(九二—九六頁參照)。それ故、文法上この兩形の混同から起る誤が甚だ多い。

土人の捕るといふ熊
朝鮮にあるといふ人蔘
敵兵既に去ると聞き
我軍勝利を得るとの報
魚釣るべからず
塵捨つるべからず

神佛に祈るべし
國恩に報ゆるべし
絲を手繰るべからず
石を投ぐるべからず
加はるまじきこと
考ふるまじきこと
雷を恐るるや
雷に懼づるや
法律を知るや
規則を心得るや
手を振るとも
幾年を經るとも
人は蔑づるとも我は關せじ
如何に論ずるとも我は答へん
言葉を訛るな
心を弛むるな
人を嬲るな
約束を違ふるな
答を澁るな
誤を傳ふるな

以上は終止形を誤つて連體形としたる例である。また次の諸例は連體形であるべきを誤つて終止形としたものである。これは國語の音韻上ラ行音の省略せられる(二四頁參照)ことのためでもあり、また二段活用を四段活用に類推するためでもある。

語ること能はず
忘ること能はず
身を思ふ時もなし
何を考ふ隙もなし

315
192

誇る｜心を取り静め
降る雨
残る｜人もなし
積もる雪

乱る｜心取り直し
時雨（シグ）る｜空
懲（コ）る｜ことともなく
いつまで埋（ウヅ）もる｜身ぞ

（四）音の延約より起る誤

音の延約（えんやく）については前章に略述べて置いた（一四頁参照）が活用の場合にも一種の延約、即ち活用形の一音よりなるものには音を添へ、また豆爾袁波等の重なつたのを省くことから、誤を起すことがある。

正
正義に與（クミ）せしむ
佛法に歸依（キエ）せしむ
行くも｜歸（カヘ）るも｜逢坂の關

誤
的（マト）を射せしむ
天命に安んずることを得せしむ
行くも｜歸るも｜勝手（カッテ）たるべし

5
2